
Lost Blue

氷月 晶

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Blue

【Nコード】

N0573X

【作者名】

氷月 晶

【あらすじ】

”それは、かつてあったことなのか、あるいはこれから起こることなのか。”

天空姫と地龍神、二柱の神が創りし＜力＞満ちる世界。

しかし今、その均衡は崩れ、物語は紐解かれる。

これは、あるオンラインゲームによって起こった「事件」によって、世界の裏側を見ることになった少女のお話です。

元々は私、‘Sassy-talkieR’ 氷月 晶が運営しており

ます辺境サイト「幻想協奏曲」のオリジナルサイドで連載しておりますWeb小説です。無断転載ではございませんので、どうぞ安心してお読みください。

なお、これは10年以上前から書きはじめた（！？）お話ですので、Program 0、1、2辺りは惨々たる文体です……。本当に申し訳ない。ですが無理に弄るとお話が壊れてしまいそうなので、矛盾や明らかにおかしいところを多少解消しただけで投稿しました。読みづらいと思いますが、見捨てないで頂けたなら幸いです。

Prologue かくて世界は作られたり

それは、時を超えた過去の話か、それとも遙か彼方の未来の話か。

あるとき、2人の神が1つの次元を賜わった。

2人の名は、天空姫と地龍神。

2人はその何もないそこに、1つの世界を創り出そうと試みた。

とはいえ、一緒に頂いた光の種に少し手を加えてやった所、勝手に出来上がった。

だから2人は、更に手を加えて自分たちと同じような存在を創ってみようと試みた。

いろいろなものが出来たので、2人は楽しんでそれらに名前を付けた。

しかし、目的のものはまだ出来ない。

そこで2人は、発想を変えてみることにした。器を先に創るのでなく、魂を先に創ろうと。

そして、天空姫は天空姫、地龍神は地龍神で2つのものを創り上げた。

それは、ふたつでひとつの愛しいもの達。

だから2人は、手放すことが出来なかった。暫く自分たちの側におくと決めたのだ。

そして世界が安定し、天空姫と地龍神の創った者達が繁栄を謳歌し始めた頃。

2人は最愛の初子達に、世界を見せてやることにした。

そのときに、ようやく気がついたことがある。

世界は、力に満ちていた。

2人の力の残滓だった。それが、「人間」と呼ばれる者達に宿っていたのだ。

2人はそれに、あと少しだけ手を加えた。人間がその力を、傷つかずに扱えるように。

だからその力は、「人の祈りを叶える力」と呼ばれている。

だが力に奢る者は必ずいるもので、そのために神を害そうと試みる者達が出てきた。

そのために天空姫は囚われ、深い深い眠りにつくこととなった。

いま、彼女がどこにいるのか、定かではない。

地龍神はそのことに嘆いた。だが、そのままではいられない。

最愛の伴侶が戻ってくるまでは、自分ひとりで世界を支えなければならぬのだから。

だから、自分を手伝うものとして6人の精霊を作った。

彼らには、自分を手伝うものを1人、あるいは1つづつ選ぶ権利を与えた。

彼らは<門>と呼ばれる神殿に住まい、世界を支える手伝いをすることとなった。

世界は何とか安定した。

しかし、その均衡は崩れようとしている。

危ういバランスを保つ天秤を押してしまったのは、1人の魔導士が作った1つのゲーム。

そのゲームの名は……

「Lost Blue」

Program 0 運命(さだめ)の齒車

「……は？ ゲーム？」

新聞の向こうから少女の声がする。

少女は食卓の上を左手だけで探っていた。

「ギョーギ悪いよ。食べきってから読みな！」

「だったら珪ちゃんも本置きなよね。いつもあたしばかり言ってるよ。ようやく見つけたマグカップを口元に運ぶ。」

「どっちもどっちでしょ！ 2人共取り上げっ！」

母親らしき女性が、新聞と本を同時にひったくった。

「あああつ、ちよ、ちよっとお母さん！ タンマタンマ、それでレポート書くんだよ！」

「後で読めばいいでしょ。ちよっとぐらいはお母さんの話聞いてよすねたような母親の顔。2人は静かに姿勢を正した。

新聞をとられた幼げな少女は、マグカップをテーブルに置いて、口を開いた。

「んで、ゲームがどうしたのよ、お母さん？」

「実はね、また新作を出すことになったんだけど、そのテストプレイを……」

「あー、私はだめだわ。レポート終わってないもん」

そう言つて、『珪ちゃん』 珪都はフォークを持ち直し、また食べ始めた。

「……沙紗は？」

沙紗と呼ばれた少女は、少し考える風にして、それから頷いた。

「良いよ、あたしは。……そのかわり……」

「ずいつ、と真正面の母親の鼻先に手を出す。」

「…何？ 家庭当番代わってコト？」

「当たたりイ！ 1ヶ月分代わつてもらうわよ、掃除に洗濯、それから食事……ってワケでちよーだい」

くるつと手をひるがえす。

それを見て、母親はにつこりと笑いながら「00」と書かれたシールのついたメモリースティックを彼女の手に置いた。

「あれ？ てつきりDVD-ROMかと思っただけだ」

「ああ、オンラインゲームだからね、それID入りなのよ。今のところ100しかないモニターの為のものよ。起動させれば、自動的にこっち繋がるから」

「ふーん。大多数で1つの同じゲームをやるんだね」

「そーよ。大事になさい」

女子ばかりの教室には、冬だと言うのに活気で満ち溢れている。

沙紗 如月 沙紗は、同じクラスの親友に今朝の出来事を聞かせていた。

「で、これがそのスティックなのね」

「あんまり乱暴にしないでよ、梓」

メモリースティックを中指と人差し指で持ち上げる少女 梓に、

沙紗は呆れた様に注意した。

「わかってるってーの！ でもいーよねー。親がゲーム会社の子つてさ、ゲームもらえるじゃん」

肘で友人の脇腹をつつつく梓。

「今回のゲーム、どんな設定よ？」

「えー、言うのお？」

「聞かしてよ！」

わざともつたいぶる沙紗の袖をつかんで、梓は思いつきり腕をゆすった。

「だあーっ、やめなさい、言うって！ えっとな……」

カバンをかき回し、ハツ折の紙を取り出す。

勢い良く広げたそれは、かなりデカイ。

「えーつとお……あつた。『世界各地の神殿を回って、Lost Blueを取り戻せ!』………だつて」

「……『Lost Blue』って、何よ?」

「遺跡らしいよ?」

沙紗は取扱説明書を素早くたたみ、机の上に放り出した。

「泉野、如月!」

びくつ、と首をすくめる沙紗と梓。

前方を見ると、自分達の担任が立っていた。

「な……中立先生え……」

「仲が良いのも成績が良いのも結構だが、朝礼の時ぐらい静かにできんのかお前は!」

バシッ、ベシッ。

「~~~~つた!………」

「何も名簿録ではたかなくたって良いじゃん!」

梓が中立に言う。

「だったら静かにしなさい、泉野」

言う通り静かになった梓達の後方で、クラスメイトが幾人か笑う。

中立は何も言わず、教卓に戻った。

「さて、これで前半の大テストが終わったワケだけど………」

そこまで言うのと、教室のそこかしこで声が上がった。

「まだ話は終わっていないわよ」

「結果は!」

「男子と女子、どっちが上だったのさ、先生!」

せっかちな娘達が騒ぎ出す。

「上位50名中、女子は27名、男子は23名いたわ。こっちの最高は……」

一気に静まり返り、中立の言葉を待つ女生徒達。

中立はゆつくりと生徒達を見回すと、ぺろつと手元の紙を開いた。

「如月 沙紗! 489点で2位よ」

沙紗に視線が集まる。沙紗自身は、自分が注目されているのをあ

まり気にせず、ぽつぽつとつぶやいた。

「満点取り損ねたな。500狙ってたのに……」

そのつぶやきを聞いて、梓はぱしっと沙紗の右腕をはたく。

「……痛いっつーの」

「この点でまだ満足しないの？ 鈍欲ねえ」

「そりゃ、興味対象だもん。どこまでいけるか。ところで瑠璃ちゃん。1位誰？」

沙紗は中立に向き直って問う。

「1位？ 1位は……495点で、高村 圭一って子ね」

「ああー！ 負けたあー！ ー！！」

大声で叫び、立ち上がる。

教室に居た誰もがひいてしまったのは、言う間でもない。

さて、昼休み。沙紗は友人とともに食堂で昼食を取っていた。

「はあ、大恥かいちゃった……」

はぐつ、とフォークに刺した卵焼きを頼張る沙紗。

隣で梓も弁当をつついていてる。

「あんな大声出すからよ。……食堂で叫ばないでよ」

「わかってるわ、よっ！」

言いながら、沙紗は1口サイズの鶏肉を突き刺した。少々硬い。

「ちよつと火い通しすぎたかな？」

「いいんじゃないか？」

すうつと後方から大きな手が伸びてきて、フォークを持った右手を持ち上げた。何も言わず、沙紗は目で追う。

鶏肉は、いつも沙紗が目になっている高さよりもずっと上で、後方の男の口に収められた。

そこで、男は沙紗から手を離れた。

「沙紗の味付けは良いね。ちよつと薄味だけど……」

「圭くん」

見上げた先にいた男 高村 圭一は、ペロツと下唇を舐めた。

彼は沙紗の幼馴染で、沙紗が油断していると時々こういう無作法をやってみせる。

「やっぱり薄かった？ 時間無かったから……」

「ちよっと」

背後から、ものすごく不審な声がかかる。

そこで、沙紗は梓がいた事を思い出した。

「何よ、『圭くん』って！ 親衛隊の私でさえ恐れ多くて呼べないのに……！」

梓の大声に、周囲が3人に注目する。沙紗はため息を1つ、ついた。

（自分が、叫ぶなって言ってなかったつけ？）

沙紗は呆れ顔のまま、圭一を見上げた。

「で、どうしたの？」

圭一はにっこりと笑う。

「沙紗、今回の前期テストも負けたよなあ？ それで、今回のペナルティだけど……」

「な………何よ」

「おごつて？」

約、5秒後。

「……は？」

「だから、昼飯おごつてよ」

「それだけ？」

「そ。それだけ」

相変わらずにここにこと沙紗を見ている圭一。

その要求にホッとした沙紗は、急にとてつもなく恥ずかしくなった。その理由は、前のペナルティが「頬にキス」だったから。

なるべく圭一に顔を見られないように立ち上がる。

「沙紗、どこ行くの？」

やっと興奮が収まったらしい梓が問う。

「ランチ買いに行くの」

「あんたの？」

「違う。圭一くんの」

「いつてらっさい。……抜け駆けしないだよ」

梓の言葉に反応せず、沙紗は手をひらひらと振って、圭一と一緒にその場を後にした。

カウンターで、圭一は炒飯にスープが付いたBランチを注文する。
計500円なり。

沙紗は財布を開けて硬貨を取り出しながら、圭一に話しかけた。

「ねえ、圭一くん？」

「ん、何？」

「圭一くんってさあ、『Lost Blue』知ってる？」

「あ、知ってる」

トレイに炒飯と中華スープをのせて、圭一は歩き始めた。

「持つてるよ、俺。……で、どーし……」

「ホントに！？ やったあつ、一人目発見！」

飛び上がるかと思うと、嬉しそうな声を出す沙紗。

（……成る程、今度の興味対象か……）

「『Lost Blue』のモニター探しか？」

「何よ、急に」

「あんたの新しい興味対象」

「ん、当たり。蒼洋の中にも何人かモニターがいるって聞いたからね」

沙紗はテーブルに戻ると、自分も席を1つずらした。

「何してんだ？」

「ちよつと梓にサービスしてんの。圭一くんここね」

いままで自分の座っていた席を指す。

圭一は納得いかなそうな表情をつくる。

（……人の気も知らないで……）

しかし、そんなことはおくびにも出さない。

圭一は表情を一変させると、いつもの水面の様な笑みを浮かべて、

梓に声をかけた。

「ここ、良いかな？ えっと……」

「いつ、泉野です！ 泉野 梓」

「じゃ、泉野さん、ここ良い？」

「もちろん！」

「ありがとう」

頬を紅潮させてうなずきまくる梓に、とびっきりの笑顔を圭一は見せた。

座ると、すぐに食べ始める。沙紗は小声で圭一に話しかけた。

「……（ねえ、圭一くん？）」

「（何？）」

「（放課後あいてる？）」

「（放課後？……今日はクラブはないから、あいてるな。んで？）」

「（コンピューター室に行きたいの。いい？）」

「（……ああ、『L・B』ね。やるの？）」

「（やりたい）」

「（OK、放課後な。俺そっち行くわ）」

「（やめときなよ、あたしがそっち行く。コンピューター室そっちにあるし）」

圭一がうなずいた。

（……視線が痛いなあ……）

改めて圭一の人気ぶりを痛感する沙紗であった……。

放課後。

「高村あつ！ 客だぞ、客！！」

「ああ？」

友人の騒ぐ声に、圭一はつい読みふけていた本から目を上げた。

「客？ 俺にか」

「おう。あの如月さんが、困ったように『あの、圭一くん……じゃ

なくて、高村くんいますか？」ってよーっ！」

友人の身振り手振りともノマネを見て、本を閉じ、立ち上がる。
ガラツつと音を立ててドアを開けると、予想通り人垣が出来ていた。

「え……えゝつと、だからあ、高村くん……」

「いーじゃん、いーじゃん！ あんなネクラは放つといて、オレと……」

「いーやつ！ぜひ僕と……」

（……やっぱり）

沙紗だ。比較的やせた体と、可愛い、しかしどこか刺のある顔立ちと性格で男子の人気を集めているのを彼女は知らない。

「おい、てめえら！」

集団の真後ろから割り入って、騒ぎの中心に出る。

圭一は、そこで沙紗の肩を引き寄せた。

「俺の沙紗に、何か用？」

「け……圭一くん、何言って……」

「いやあ、悪い悪い。待ってる間だけ……と思ったら、つい読みふけっちゃってさ」

につこりと笑って沙紗の言葉を遮る圭一。沙紗は一転、呆れ顔だ。
「気持ちわかるけど……こっちも男子校舎に来づらいんだから、出来ればすぐに気付いてよ」

「はは……。とにかく、用意してくるよ。待ってて」

圭一が集団をぬって教室に入ると、騒ぎは一気に鎮静化した。

沙紗はほっとして、ほぐれかけたりボンをほどき、髪を結い直す。

「沙紗」

カバンを肩に引っ掛け、圭一は近寄ってきた。

「さて、とつと行こうぜ」

目的地は、東校舎・コンピュータールーム。沙紗達の通う私立蒼洋学院では理系・情報系・男子の教室は東に、文系・家政・女子の

教室は南校舎にある。授業のときはともかく、放課後などの自由時間に校舎を跨いで移動するのはかなり恥ずかしいものがあるのが、この進学校唯一の不満の種だ。

「あ、先客がいるぜ」

「先生だつたらやだなあ」

苦笑する沙紗。圭一もうなずいて、ドアを開けた。

「先生じゃないことを祈るよ……ラッキー、中等部の子みたいだ」

「この時間に？」

沙紗は靴をゲタ箱に放り込み、中を覗いた。

ミラー・ゴーグルをつけて、キーボードをたたいている人物が見える……が、女子制服のリボンタイ以外は全て私服のようだ。

「中等部で私服かあ……勇氣あるね、あの女の子」

「あ、女？」

「……よく見なさいよ」

くだらない話をしながら、2人は中等部の少女の後方に陣取った。メモリースティックを押し込み、手早くミラー・ゴーグルをパソコンにつける。

「それじゃ、アクセス開始！」

2人同時に、“中央”（セントラル） 沙紗の母親、理彩が勤めている『ポプリポット・カンパニー』にアクセスし、完了するまでにゴーグルを付けた。

「……一体、どんなストーリーなんだろ……」

沙紗の独り言が聞こえたのか、後方の少女はゴーグルをはずし、ぼつりとつぶやいた。

「それは、貴方が創り出すんですよ。世界は、貴方の手の内にあるんですから……」

Program 0 , Clear !

P r o g r a m 0 運命(さだめ)の歯車(後書き)

初稿は何と2000年。

当時はパソコンがやっとカラーになって普及してきた頃で、記録媒体といえばフロッピーディスクでございました。流石に初稿のままではこのオンラインゲーム隆盛の現代から見れば時代差が大きすぎるので、最新稿ではメモリースティックに変更してあります。

Program 1 GAME START

ミラー・ゴーストを通して見るのは、コンピューターで創られた、
電脳世界だ。

くらくらする程色彩やかなポリゴンが躍り狂う。

色彩のトンネルをくぐり抜けると、そこはすでに“中央”（セントラル） オンラインゲームの管理者の一般的通称だ の管理
する、ゲームのオープニング画面であった。

ポン、と軽い音が響いて、ダイアログボックスが開く。

>IDナンバーを入力して下さい<

沙紗と圭一はそれぞれ00と25を入力した。

>ようそこ、オンラインRPGの世界、『Lost Blue』へ

！ 新規登録者は、こちらへお進み下さい<

空間に浮かぶ2つのドアの内、左側のドアがぼんやり光る。

「すすめっていわれても……どーやって行けっていうのよ？ マウス
ポイントもないし……」

沙紗が圭一の服を引っ張ると、圭一は困り切った声で言った。

「俺に聞くなよ！ ……とりあえず、ドアの方でも見とこーぜ」

「う、うん」

沙紗達がドアを見つめると、すーっとドアが自分に近付き、音も
なく開いた。

「すごい……」

2人共、思わず呟いた。それだけで、今までのゲームとは何かが
違う。

>キャラクター設定をします。まず、キーボードでプレイヤーの名
前を登録して下さい<

「……………」

無言でキャラクター設定を開始する。

身長、髪の色・長さ、目の色、顔立ち……設定事項は山程あった。

だが、目線を察知するゴーグルを付けた上で“中央”側が予測変換を行っている為、そんなことは雑作もない。

決めることといえ、キャラクターの年齢、性別、名前、それからゲーム内での職業^{ジョブ}くらいだ。何か間違っているようなら、最終確認のときに修正すれば良い。

「年は……16、性別は女で、名前は……サシャでいいや」

「無難だな。俺も、ケイくらいにしとくかな」

「ねえ、ジョブどうした？」

困り果てたように、沙紗はゴーグルを跳ね上げる。

「ん、俺？ 魔導戦士にしたけど」

「細分化されてるほうよ。あたしどれにしようかなあ……魔法は捨てがたいし、でも剣士も良いし……」

「ま、いつも使い慣れてるモンを切り捨てろって言う方が無理だな。その点で言わせてもらえば、このゲームちよつとおかしいと思うけど……俺、方陣術使いにした。慣れてるし」

「方陣術？ 珍しい、支援系にしたの？」

方陣術というのは地術に属し、魔法陣を駆使するものだ。魔法陣の内部に効果を及ぼすものが多く、基本的に支援・防御を得意とする<術>である。

「自分も戦うけどな、武器が槍だし。パラメータ調整できるみたいだから、前線にも出れるようにしておくよ」

「それはとりあえず、圭くん本人が方陣術士じゃない。ものすごくちよつどいいものを見つけたなんて、良いなあ……」

沙紗はゴーグルをはずし、形の良い唇をとがらせた。

圭も同じ様にゴーグルをはずし、ひやかすように笑った。

「一番下に魔法剣士ってあるぜ。あんたにはそれが良いんじゃないか？」

「えっ、ホント？」

慌てて探す沙紗。

「ウソ言ってどうする」

笑う圭一と沙紗の後ろから、急に声が投げかけられた。

「……後ろのお二方」

ギクツとする2人。そろりと後ろを見ると、先に入っていた少女がこちらを見ていた。

「楽しげなのはよろしいですが、あんまりはしゃぐと、声を聞きつけて先生が来てしまいますよ」

につこりと少女が笑う。

「は、はあ……」

「ご忠告どうも……」

一応、笑っておく沙紗と圭一。もし傍目から見ると、異様な空気を感じ取ったことだろう。

「……あ」

急に少女は思い出したように手を打った。

「私、姫月 怜香っていいです。中等部3年なんです」

おつとりと微笑んで、少女は自己紹介をする。沙紗もとりあえず取り繕って、少女に応じた。

「あたしは、如月 沙紗。高等1年だよ」

「同じく高等1年、高村 圭一。宜しくね、姫月さん」

圭一は怜香に向かって微笑んだ。沙紗は何も言わない。

「ああ、怜香で構いませんよ。これから一緒に冒険することになるでしょうし」

「……は？」

2人は呆けた顔で怜香を見た。彼女はまた笑う。

「キャラ設定が終わったのなら、あとは家でプレイした方が良いでしょう。先生、来ますから」

言いながら、メモリースティックを取り出し、ミラー・ゴーグルをコンピューターから引き抜いた。スティックには、小さなIDナンバーらしきシールがくっついている。

「それでは、また」

てきぱきと道具をしまうと、さっさと怜香は帰っていった。

「……一体何だったの？ あの子……」

「さあ……帰った方が良さそうだな」

「そうだね。帰ろっか」

「ただいま」

沙紗が誰もいない玄関で声を上げると、キッチンからフライパンと菜箸を持った若い女性　長姉の沙都花が出てきた。

「ああ、お帰りなさい、沙紗ちゃん。学校どうだった？」

「可もなく不可もなく。良いことって言えば、学年2番くらいだよ」
「それは相当すごいことだと思うんだけど……」

沙都花が眉根を寄せる。対する沙紗は、靴を脱いでぱっと笑った。
「へへっ、すごいでしょ」

「まあね。それより、学校どうなの？ いじめられたりしてない？」

沙紗ちゃんはすぐく人見知りする子だから心配だわ」

心配そうな沙都花。

沙紗は、そんな姉を安心させるようにふわつと微笑う。

「そこまで心配することないって。大丈夫だよ、友達いるし」

「それに、圭くんも、でしょ？」

「何でそこに圭くんが出てくるの？」

心底疑問そうな妹の姿に、沙都花はくすくす笑った。

「沙紗ちゃん、早く手洗いとうがいして、着替えてらっしゃい。お姉ちゃんも早く御飯作っちゃうから」

「はあーい」

軽く手を上げ、沙紗は階段を上っていく。その途中、きゅう、とお腹の虫が鳴いた。

「……あの後先生が来なかったら、お小言言われずに、早く帰ってこれたはずなのに……そして今ごろ御飯食べてたはずなのに！」

そうなのだ。あの姫月　怜香と名乗った少女がコンピュータールームから出たのと入れ違いに、教室管理の　しかもよりによって高等部の　教師が姿を現し、やれ学年1位2位だからと暢気なも

のだ、ゲームに気を向ける余裕があるなら勉強しろ、と盛大に嫌味を言われたのだ。

渋い顔で軽く頭を振り、嫌な思い出を頭から追い出すと、部屋に入ってぽいっと鞆を放り出す。

「何着て降りよっかな？」

言いながら、黒いモヘアのセーターとオフホワイトのショートパンツをクローゼットから引っ張り出した。

「……よし、これで良いね」

暫く睨みつけて納得すると、沙紗は制服を脱ぎはじめた。

上着を脱ぎ捨て……ふと、部屋の片隅にある姿見に、背中を映す。

「まだ……消えない……」

彼女の背には、翼をたたんだように見える痣　幼い頃に負った火傷の名残が大きくあった。

「ただいま」

「お帰り、圭くん」

圭一は沙紗の家からそう離れていないマンションに住んでいる。女性の声を聞きながら足元の靴を数えてみると、いるはずの人数より2足足りない。1足は自分のものだ、とすると……。

「あれ、姉貴は？」

「まだみたいだよ？　お兄ちゃん、おかえり」

ドアの裏からひよっこりと顔を出す少女。手には漫画の単行本がある。

「んー……　つたく、お前またトイレに本持ちこんでたのかよ」

目の前の少女に対して、圭一は呆れ顔を作った。

「いーじゃん、これ小夜の本だもん」

「あーそーかい」

圭一は小夜子こよ子をやり過ごして自分の部屋に鞆とループタイを放り込んだ。

「着替えないの？」

「電話し終わったら着替えるさ」

すたすたとリビングに向かって歩く圭一。小夜子もついていく。

「子機使っよ」

キッチンとリビングを隔てるカウンターに手を伸ばし、コードレス電話の子機をつかんで、リビングのソファーに陣取った。

そらで電話番号を押す。

「え、何々？ カノジョん家に電話するの？」

「んなわけないだろ。センパイだ、センパイ。邪魔すんなよ、小夜子」

「はい、はい、聴きませんよー」

「言ってるそばから聞き耳たててんじゃねーよ！」

真横に座る小夜子に、逆側にあったクッションを投げつけた。と同時に相手に繋がった。

『はい、木谷です』

「あ、和己？ 俺だよ、俺」

『お、珍しいな、圭一。メール族のお前が電話かよ』

「ま、たまにはそう言うこともあるさ」

『さようか。ところで、何の用だよ？』

先輩、という割には、随分うちとけた話し方だ。

それもそのはずで、高村 圭一と1歳年上の木谷 和己、そして如月 沙紗は昔からの友人同士である。

「なあ、和己。確か、『Lost Blue』のモニターになったって言ってたよな？」

『ああ、沙紗ちゃんのお袋さんから頼まれたからな、郵便で。これからユーザー登録しようとしてるところ』

微かに響くコンピューターの音を、圭一は電話の向こうから聞き取った。

小夜子は圭一に近付いて、会話を聞き取ろうとした。

「小夜、おまえはチビとでも遊んでろよ」

「だってチビってば、まだ寝てるんだもん！」

チビ、というのは、ペットのハムスターの名前である。

「なら起こせよ。もうじきメシの時間だろうが……って、あいつ待ってるぞ」

「あ、ホントだ！」

ハムスター大好きの小夜子は、大慌てでペレットの袋を引っ張り出してペットの下へと駆け付ける。

やれやれ、と圭一は頭を振りながら溜息をついた。

「やっと騒がしいのがなくなった……和己？ 悪かったな。話の腰折っちまって」

『別に気にしちゃいねーよ。お嬢とロゲンカはいつものこつたる？』
抑えがちの笑い声が聞こえてくる。

『で、どうした？』

「あー、そのゲームさあ、晩メシの後からできるか？」

『出来るぜ？ じきに設定終わるし、明日土曜だから夜更かしできるしな』

「じゃあさ、8時頃に、ゲームの中で会おうぜ」

『おう。また8時頃な』

通話終了。圭一はコードレスの子機を元の場所に戻した。

「あれ、電話終わったの？ なーんだ」

小夜子が手の中でチビを転がしながら、残念そうに口唇を尖らせる。

「遊んでから盗み聞きしよっかなーって思ってたのに」

「ばーか、お前が裏かけるほど俺は甘くないぞ」

クッククック…と押し殺した声で、圭一は笑う。

「圭くん、小夜子、そろそろ御飯よ。用意が出来るまでに、圭くんは着替えて、小夜子は手を洗ってらっしゃい」

「はい！」

「ん。……あ、俺の御飯少なめにしてくれる？ 食べたらすぐ引込むし」

涼子は、圭一の瞳を見て、一瞬身をすくませた。

子供の様に綺麗な、薄青のかった彼の瞳に、幽かな、刺すような光が浮かんだ気がする。

しかしその印象は、圭一が目瞬きをするとすぐになくなった。

「涼子さん？」

「え…ええ、わかったわ。ちゃんとしとく」

「ありがとう。着替えてくるよ」

それきり、くるりと圭一は背を向けた。

涼子は小さく溜息をつくと同時に、圭一の心の中身を見てみたい、と思う。だが、それは叶うべくもない。

人の心を読む魔法など、この世には存在しないのだから。

机に置いたデジタル時計が、「P・M・8:03」と刻んでいる。
「ちよつと遅くなったな」

圭一は、自分の部屋で1人、呟いた。

パソコンを起動しアクセスする間に、さつさとミラーゴーグルを付けてしまう。その内側は、すでにきらびやかなネットの世界だ。

<IDナンバーを 入力して下さい>

無機質にディスプレイに浮かぶ文字を、ゴーグル越しに見つめる。
<データ・クリア 右側のドアにお進み下さい>

ほんのりと光るドアを見ると、昼間の倍以上の速さで近づく。

「え？ちよつと、早過ぎ……」

ギリギリまで近付くと、ドアに丸く蒼い紋様が描かれているのが解った。しかしすぐに取手が回り、観察する間もないまま真っ白な空間に放り出され……それと同時に、圭一の意識も吹っ飛んだ。

その後しばらくして、まぶたを突き通す光のまばゆさに、彼は瞳を開いた。

「あ、起きた？」

帽子を被った見覚えのあるような少女が、圭一をのぞき込んだ。

圭一はゆっくり起き上がる。

自分の置かれている状況がわからない。

「大丈夫？ 『ケイ』」

（……ケイ？）

「俺は、圭……！！！！」

自分の名を言おうとして、服装に驚いた。

（俺はこんな服、持ってないぞ！？ 大体、どこに売ってんだよ……）

圭一は、硬めの布地で作られた立て襟の長衣ロブを着ていた。目の前の少女の方は、短めのワンピースに共布の帽子、そして腰にはショートソードが吊られている。

「びつくりしたでしょ、圭一くん。……圭一くん、で合ってるよね？」

「その声……沙紗、なのか？」

少女 沙紗がうなづく。そして、程近い地面の「光」を指差した。

「気が付いたら、あの紫の魔方陣の上に立ってて、魔方陣から出たら、圭一くんも出てきたの」

「魔方陣から？」

またうなづく。圭一は沙紗と共に、魔方陣に近付いた。

「圭一君、何の方陣かわかる？」

「これは……空間方陣だな、中級の……転送陣？」

片膝をついて、圭一は確認する。文字を指差しながら、沙紗に説明し始めた。

「ほら、ここに描くのは転送先で、こっちが自分の今いる場所。紫色だから、ここは転送先だな」

「何て書いてあるの？」

「ちよつと待つて。ラグ……『ラグナロク・アルカディア』……？」

圭一は立ち上がり、長衣の膝あたりをはたく。

「あれ？ どつかで聞いたような……？」

「あれだろ、神話の」

「神話……あ、ああ！」

苦笑気味の圭一の目の前で、沙紗がぼん、と手を打ち鳴らす。

「そうよ、魔導の授業で聞いたんだわ！ 世界の名前があんまり長ったらしいんで、すっかり忘れてた」

「……あんたらしーわ」

呆れて髪をかき上げる圭一。

（それにしても、転送陣？ 同じ世界で転送陣を描くことなんて、そもそも出来ないはずなんだが……）

「……圭一くん？」

「あ？」

思わず思考に没頭していた圭一を、沙紗が不思議そうに覗き込む。

「どうしたの？」

「いや、ちよつと考え事……それより、周りが何かおかしくないか？」

「うん、何か……いるよね」

自然、2人は死角を無くすために背中合わせになった。

茂みが、不意にがさりとゆれる。

「3つ教えて……走ろっか」

「OK、沙紗」

微かに膝を曲げる。

「いち……」

「にい……」

じりつと足元の地面を踏みしめ、圭一はナイフを取り出した。相手は狼らしい。うなり声が聞こえる。

「「さんっ！！」」

圭一が先を行き、手にしたナイフで枝葉をできる限り払う。

沙紗はとにかく、転ばないように走っていく。

「どこまで走れば良いのよ！」

「知るかつ！ とにかく走れ！！」

走っているだけで良い訳がない。

このままではいつか追いつかれる。そう思った矢先……。

「うわあっ!？」

目の前に光と、景色が広がった。崖である。

圭一は足を滑らせ、崖から落ち……かけた。ナイフを持っている右手を、沙紗がつかんでいる。

「圭一くん……!」

「悪い……ドジった」

足場を探すが見つからない。

（やばいな……）

沙紗が自分を支えていられるのは、恐らく剣士としてのパラメータ調整の賜物だろう。だが、少女の細腕でいつまで持つものか。砂利のきしむ音が近付いてきた。が、狼とは違うようだ。

「お嬢、何してんだ？」

沙紗は、振り返って背後の男を見上げた。後方に少年もいる。

「何してんだ、って……見てわからない?!」

のん気そうな口振りに、ムツとして声を荒らげる沙紗。

「おお恐、そんなに怒らなくても良いじゃないか。手伝ってやってやら、何かくれる？」

男は片膝をつき、沙紗の頬に触れた。

（……この声は……）

「和己っ！ てめえバカやってないで、とつと助けるオっ!!」

「っ、圭一!？ 一体何やってんだよ？」

崖下からの声に驚いて、男 和己は慌てて崖を覗き込んだ。

「狼に見つかって、走って逃げてきたんだ」

「はあ……。潤一、上げてやってくれ」

呆れ顔で圭一の話聞き、後ろの少年、潤一に声をかけた。

「OK! ……天あまかける風の精霊たちよ……」

彼の持つロッドの宝珠が輝き、圭一の体は重力に逆らい、浮き上がる。

沙紗が引つ張ると、崖の上に降り立った。

「な、何だよその女みてーな格好は!!」

和己は圭一の服装を見て、大笑い。圭一は無視して、ナイフをヒップバッグにしまい込み、代わりに30cmあるかないかの小さな棒を取り出した。

「うーむ、これは……杖か？ マトモなもんじゃないな、方陣術士の初期装備……」

「でもよ、そろそろお客さんが到着するぜ？」

和己は軽い口調で言いつつ、両足に結わえつけたダガーをそれぞれ手にした。

圭一は棒の真ん中あたりをひねり、2mほどになったそれを振り構えた。

「……」

和己はふと、片手を口許に当てて考える仕草を見せる。

「……なあ、お嬢？」

「何？」

「危険なことなんだが、お前さん陽動はできるか？」

「あたしを何だと思ってるの？ これでも剣士よ」

沙紗はそう言ってニツと笑うと、腰に下げたショートソードを抜き払った。

「おーし、じゃあ潤一、お前はお嬢を手伝ってやれ……来るぞ！」
茂みから狼が飛び出してきた。

これが普通のゲームなら、今頃戦闘用の画面に変わっているだろう。

「Hey, hey, hey! C'mon, boy! (こっちにおいで!)」

横ざまに跳び、剣をちらちら振り回す沙紗。

彼女の声を聞くと、圭一は杖を地面に突き立て、左手を当てた。ばおつと左手の中心が光り、杖も淡く輝く。

「空間方陣……結界陣っ！」

一瞬で圭一を中心に光のドームが構成される。

直後、潤一の魔法が炸裂した。

「炎舞!!」

戦闘、開始だ。

「……これで、ラストおっ!」

最後の1頭の額に、和己が的確にダガーを投げつけた。

「……お、終わったあつ!」

動くものが何もなくたって、真っ先に言葉を発したのは潤一だ。ばたつ、とその場に座る。

「何だあ、もうバテたのかよ?」

からかいながら笑うのは、和己だ。潤一はロッドで叩こうとしたが、簡単に和己に足で止められた。

ムツとして、見上げて言う。

「しょうがないじゃん、魔法使いはそんなもんさ! ……ところで兄ちゃん、そっちの2人、誰?」

「ああ、こいつは圭一。兄ちゃんのダチな」

和己はがしつと圭一と肩を組む。

「方陣術士のケイ。それが、こっちでの名前だ」

圭一は杖を元通りにしてバッグにしまい、ニツと笑った。

「で、そっちのお嬢が……あー、どっかで見たことあるんだけどなあ……」

モウロクしたかね、と頭を掻く和己。

「何言ってるんだか……和己、彼女を忘れたのか? いつも3人一緒だったのに」

圭一は呆れて溜息をついた。

「……3人、一緒?」

沙紗は小さく苦笑する。

「仕方ないよ、ゲームだもの。それに昔とは、多少なりとも顔も声も違うから」

沙紗はショートソードを鞘にしまい、口を開いた。

「あたしは魔法剣士サシャ。覚えてない? 和くん」

「…………え？」
目を丸くする和己。

7年前の、夏のある日。

ノースリーブのワンピースの下に包帯を巻いた黒髪の少女が、幼い和己と1つ年下の圭一を見ていた。

「じゃあ、行ってくるね」

少女は明るく笑ってみせた。

「手紙、絶対くれよな」

「うん、わかってるよ」

泣きそうな和己の方を、圭一が軽く叩く。

「泣くなよ、和己」

「泣かねーよっ」

くすくすと笑う少女。その時、母親が車の中から呼んだ。

「火傷治ったら、すぐ帰ってくるよ」

姉にドアを開けてもらい、中に入る。

窓を開けて、顔を出した。

「そしたら、また遊ぼーね！」

ばいばい、と少女は手を振った。

「あの、沙紗ちゃん……？ 沙紗ちゃんも帰ってきたのか！ ひよつとしてそのキャラデータ、今のカツコがモデル？ ずいぶん見違えたな！」

まじまじと和己は沙紗を見た。

「何時帰ってきたと思ってんだよ。去年だぜ、去年」
呆れる圭一。沙紗は笑う。

「いやあ、おばさんからの連絡って、つい昨日きた郵便だけだったから……」

「ごめんね。色々忙しくて、手紙とか出せなかったの」

「そうだったのか。……改めて、オレは盗賊^{シヤッフ}のカズキ。こっちのチ

「ビ助は従兄弟なんだ」

ぴっ、と和己が潤一を指した。潤一はぱつと立ち上がる。

「僕は召喚士のジュン！ 召喚士っていつでも、魔法もちゃんと使えるから安心して良いよ」

屈託なく笑う少年。

沙紗は、ひそかに顔をしかめた。先程は一緒に戦ったとはいえ、彼は初対面で、信用ならない。

怖い。沙紗の心の奥底で、何かが揺らぐ。

（……信じられる？初めて会ったこの子を）

「……大丈夫か？沙紗」

圭一がそつと耳打ちする。驚いて、ビクツと体が震えた。

「あつ、……うん」

沙紗は気丈に笑うが、内心では笑顔になっているかと怖かった。

「宜しくね、潤一くん……ジュンくん」

握手した手は、殆ど変わらない大きさなのに温かかった。

P r o g r a m 1 , C l e a r !

P r o g r a m 1 G A M E S T A R T (後書き)

初稿は2001年2月が最終。

当時のノートに書いたイラストの隅っこに「2001'2'3」とありました。

Program 2 School Life

「Hi, Sassy!」

登校途中、背後からの声に沙紗は振り向いた。

人波を縫って走ってくるのは、1つ上の友人、北川 夏美。治療のためにアメリカへと渡った頃からの親友だ。

「おはよう、夏美。毎度、よくこんな沢山の人間の中からあたしを見つけるわね。感心するわ」

「うふふ、サシイを見つけるのは得意なのよ。How are you? (元気?)」

肩に手をかけ、笑顔の夏美。沙紗も笑い返した。

「うん、すつごく元気だよ。夏美も元気そうだね」

ややオーバーアクション気味に手を広げて沙紗が言うと、夏美は空いている手を額に当て、大きく溜息をついて歩き出した。

引っ張られて沙紗も歩く。

「ダメダメ、日本語じゃなくて英語で返さなきゃあ」

「ここは日本だよ」

「だからこそ英語なのよ! 英語が恋しいこっちの身にもなってチヨウダイ」

わざとらしくよよ、と泣き真似を見せる夏美。

何となく気持ちかわかるのか、沙紗は困ったように微笑んだ。

「まあ、仕方ないといえば仕方ないんだけどねえ……あ」

沙紗の肩から手を離し、ぽん、と手を打つ。

「今度は何?」

沙紗は片眉を上げて首を傾げる。首許で結われた長い髪が、さらに揺れる。

「サシイだったら『Lost Blue』って知ってるかな。ワタシ、ちよつと前にポプリポット・カンパニーのテストのモニタに応募したんだけど、あろうことかそれに受かったちゃってね?」

夏美が可愛らしく首を傾げながら話すと、沙紗は目をキラキラさせて夏美を見た。

「……それ、ホント？」

「ホントだよ」

夏美が頷いてみせると、沙紗はこっそりとガッツポーズをとる。人前で滅多にしないその行動を見る限り、彼女はよっぽど嬉しかったらしい。

夏美は、そんな1つ下の親友の姿を微笑ましく思う。

かつての彼女は、そんな行動は決して取らなかった。人間不信にも近かった沙紗の笑顔を初めて見たのは、日本人学校で出会ってから丸1年以上経ってからだ。

「で、知ってるんだね、その様子だと」

「もちろん！ あたしもモニターだよ。ああ、嬉しいな。こんな近くに3人も……」

まるで祈る様に手を組み合わせ、沙紗は言う。

彼女の唯一の難点は、このとことんまで自分の好きなものを追い尽くすタチだろう。この点に関しては、いかに付き合いの長い者でもいささか引き気味になる。

「……サ、サシイ？」

その時。

「あれ？ そこにいのって沙紗ちゃんか？」

「え？」

くるりと沙紗が振り返る。

「おう、おはよ。久しぶりだな」

和己だ。彼は沙紗達に追い付くと、自転車を降りて歩きはじめた。「おはよう、和くん！ こんなすぐに逢えるとは思わなかったよ」

「俺も同感。あの後圭一のやつに髪形とかは聞いたんだけど、見つからないと思ってたぜ。……ところで、圭一と違ってオレは昔の呼び方のままい？」

「あ……嫌だった？」

「嫌っつーか……何かなあ、ガキのままのような気がして落ち着かねえな」

軽く肩を竦める少年の様子に、沙紗は眉根を寄せて考えた。

「じゃあ、和己、くん……言いにくいな、これ。ともかくあの後、どうだった？」

あの後、適当な町の宿で休息を取った沙紗は、いつの間にかパソコンの前に座っていた。何時間とあったような体感時間に比べ、実際時間は1時間程度。

気味が悪くて問うてみたのだが、和己からの答えはおよそ期待とは違っていた。

「あの後？ ……あの後って、何？ 何かあったか？」

「え？ お宿で寝た後、よ……？」

「ああ、セーブの後？ フツーにパソの電源切ったけど。……どうした？」

同じ状況だったと思っていた沙紗の目が丸くなる。

「あ、あ、ううん。何でもない」

（おかしいな、ログインの方法が違うのかしら？）

しかし、世間というものは考える時間を与えない。

「ねえ、サシイ。この人誰？」

疎外感でも感じたか、夏美がひよこつと首を突っ込んでくる。

「なかなかお似合いじゃない？ サシイと……」

じいーつと、夏美は和己の顔をみつめた。

「あ、ひよつとして北川 夏美ってひとか？」

オレは木谷 和己。同じ高2だよ」

「……なんでワタシの名前知ってんの！？」

驚く夏美。さらりと和己は返事する。

「沙紗ちゃんから手紙来た時、写真見た。一緒に写ってる日系の子、お前さんだろ？」

「ええー！ サシイってば、写真送ったのお？」

かくして、平和でごく普通の一日が、今日も始まる。

「おはよう、沙紗！」

「あ、梓。おはよ」

後もう少して教室、というところでぼん、と肩を叩いたのは、クラスメイトの梓だった。なにやら切羽詰った様子だ。

「ねえねえ、ちよつと聞いてよ」

斜め後ろから、沙紗の左側に移動してくる。

「高村さんが、いないのっ！」

「……は？」

心底真面目な　むしろ切羽詰ったような梓の表情に、沙紗は思いつきり不審げに顔を歪めた。

「どこにもいらっしやらないのよ、沙紗あゝ!!」

梓は沙紗の肩を掴み、だっ子のようにぐいぐい揺さぶる。

「えっ、ちよつ、待って、梓！」

肩をぐるりと回して手を外すと、沙紗は梓の両肩をつかむ。

「順に話す！」

正面を向かされた梓は、半泣きで沙紗の顔を見上げた。

「あのね、私ね、今日もサッカー部の練習見に行こうと思って、グラウンドに行ったの……そのお、タオル持って……」

「うんうん」

手をもぞもぞさせながら話す梓の背を押して、沙紗達はS1-Aと書かれた教室　6階建ての南校舎で、4階の東端に位置する

に入ってしまった。

沙紗は自分の席に鞆を置くと、すぐに右を向いて座り、続きを促した。

「サッカー部の名コンビ、知ってるよね？　高村さんと、木谷先輩……なんとなくバランス悪いなって、練習見てたら……」

膝の上に手を揃え、がくーっとうなだれる梓。

「見てたら……どうしたの？」

「コンビが揃ってなかったのよ！　高村さん、朝練休んでたの！」

「……何かあったかね」

沙紗が溜息混じりに零した途端、梓ががたと立ち上がった。
「それだけ?! 沙紗って冷たい……!」

周囲の視線が2人に集まる。

沙紗は慌てて立ち上がり、梓を教室から引きずり出した。

「梓、グラウンドに行こうよ。始業には、まだ充分時間あるし」
「え?」

「サッカー部のヒトに訊こうよ。それが一番早いっ」
逃げるように廊下へ出てから、梓は沙紗の腕をつつく。

「沙紗」

「ん……?」

エレベーターのボタン下のスロットルに、高等部生専用のIDカードを突っ込んで、沙紗は降下のボタンを押す。

「沙紗さ、高村さんと知り合いよね? 何か知らない?」

「仕事かな……と思うんだけど」

「仕事あ?」

梓は驚いて目を見開いた。

「まさか、高校生だよ?」

「高校生でも10時までなら働けるわよ。ま、知らないんなら別にいいけど」

目線を合わせず、エレベーターに乗る。

「……沙紗、何知ってるの?」

「べつにつ?」 ところで、梓は何を訊く? けっ……高村くんのことだけ?」

「あ、あと練習のスケジュール聞きたいです!」

「……わかったよ」

友人のミーハーぶりに、沙紗は小さく溜息をついた。

「グラウンド広いわね。何だってうちの学校、こんなムダに敷地あるのよ」

冬日の光を手で遮りながら、沙紗はぼやく。

「でもどこでサッカー部が練習してるのかって、すぐにわかるよね」
「うん。部室見えるし」

そろそろと、しかし足早に歩き始める2人。

「そして何でわかるってさ……」

「アレよね、絶対……」

即席のコートの周囲には、女子の垣根ができていた。

『きゃあ、〇〇先輩！』だの『××さん、カッコイ！』だの、
騒々しい事この上ない。

（嫌だなあ……頭が痛くなりそう）

人ゴミの苦手な沙紗に、垣根を突っ切る勇氣はない。

「沙紗、大丈夫？こういうの苦手でしょ？」

「いつそコレが男だったら、目をつぶって走り抜ければいいんだけど……」

髪に手をやってため息をつく。梓は沙紗の背中を軽く叩いてやった。

「部室の方から迂回しようよ。あっちは人垣切れてる」

「うん、そうして」

そして同じ頃。

つい先刻まで後輩達へ指示を飛ばしていた和己が、ふと足を止めた。

「先輩？」

「何でもねえよ。練習続けてろ」

追っ払うような仕草で促すと、和己は人垣と逆の位置にいる女生徒2人に走り寄った。

「よう、沙紗ちゃん」

沙紗は和己が近付いてくるのを見て、軽く笑い、手を上げた。

「何かあったか？」

「ん、特に何でもないんだけど……圭一くんは？」

「来てねえよ。仕事だとさ」

おどけたように肩を竦める和己にやっぱり、という表情をする沙紗。

梓はあからさまにうなだれた。

「沙紗ちゃんは予想してたっばいな。……そっちのお嬢、誰？ 沙紗ちゃんの友達か？」

「泉野 梓よ。あたしの友達」

「そう。宜しく、梓ちゃん」

「ぱちっ、とウインクする和己。」

「こっ…こちらこそ！」

反射的に梓は頭を下げた。持ったままのタオルが、胸の辺りでぐしゃぐしゃになる。

「ところで、御用はそれだけ？」

「あともう一つ訊きたいんだ。練習のスケジュール教えて？」

「なになに？ 沙紗ちゃん何かくれるのかい？」

「ざーんねん！ あたしじゃないんだな。こっちの彼女が訊きたがつてるのよ」

ぼんっ、と沙紗は梓の背中を叩いて押し出した。

「ふーん、マジで残念だなあ……」

名残惜しそうに（というより物欲しそうに？）沙紗を見て、和己はハーフパンツのポケットからぼろぼろの紙切れを取り出し、梓に渡した。

「それに一週間のスケジュール全部書いてあるぜ。」

「この小っちゃいのに、ですか？」

不思議そうな梓に、和己はにっとなつ。

「ぼろぼろでワリイけどな。……そろそろ戻らにゃ」

ちら、とコートを見る和己。

「あ、ごめんね？ 引き止めちゃって。あたし達もそろそろ行くわ」

「ああ……そうだ、沙紗ちゃん」

歩き出していた足が止まる。

「また、3人で遊ぼうな。なかなかオフ重ならないと思うけど、怪

我ももうないんだし、思いっきり……な？」

嬉しそうに聞こえる、和己の声。

7年振りに聞く、幼なじみの声。

「約束だったろ？」

(……確かに、あたしは言った。今でもしっかり覚えてる)

沙紗は思わず口許をゆるませる。

「うん、約束……また、遊ぼうね！」

振り返り、彼女は勝気そうな笑顔を見せた。

何事もなく過ぎて、昼休み。

木谷 和己は、友人と屋上で弁当を広げていた。

「おい、木谷。何か鳴ってねえ？」

「ワリイ、オレのかわ」

制服ズボンのポケットから、携帯電話を取り出す。

「はいはい……なんだ、圭一かよ」

「なんだ、って……お前、誰だと思ったんだよ。いい加減電番登録しやがれ」

ふてくされた声を出す圭一に、和己は喉の奥で笑う。

「仕事、どうだ？」

「まあまあ……」

「元気ねえなあ、若いモンが」

「1歳しか変わらないのに言われたくねえよ」

「……何いらついてんだよ？」

試しに訊いてみると、小さなため息が聞こえてきた。

「風邪引いて頭が痛いんだよ。それに加えて本日スケジュールが詰まっててさあ……休みてー」

「詰まってるって、どれくらい」

「1日で録音からPVまでやりましょう強行ツアー」

「うへっ……」

思わず和己は奇声を上げてしまった。

「苦勞話はお前が学校に来たら聞いてやるって」

慌てて立ち上がった、柵まで移動する。

「体壊すなよ」

『もう壊してるって。風邪引いてるつつつたる』

「あーあ。ま、がんばれや」

『んー。……あ、夜にはネット繋ぐから』

「OK。そいじゃまた、ゲームで」

軽い電子音と共に通信を切り、元いた場所に戻る和己。

「今の誰だったんだ？」

「ダチだよ、ただの」

「ホントかあ？」

ひやかす様に、肘でつついてくる。和己は英単語帳で一発はたと、食べかけの弁当をかき込んだ。

（午後の授業って、ネムイのよねえ……）

時々眠りそうになりながら、北川 夏美は6限目の英語の授業を聞いていた。

アメリカ育ちの彼女にとって、日本の英語は口語ではないので解り辛いのだ。

（もっとフランクなのを教えればいーのに）

口許を隠して欠伸をする。

（でも、聞かないワケにはいかないし……Testきらい）

「北川、どうした？そんなしかめっ面して」

「えっ？」

ぎくつ、とする夏美。まさか『口語じゃないから解らなくて気が抜けてる』とは言えない。

「いつ、いえいえ、何でもアリマセン！」

思わず声が上がった。

「そうか。じゃあ2行目を訳して」

「はあ……」

とりあえず、夏美は教科書を持って立ち上がった。

「えっと、A h……先生、『much more』はどう訳しました？」

本人は大真面目。

その様子に、周囲は苦笑を禁じえなかった。

「長谷川先生？」

「……お前ねえ、本当に帰国子女かい？」

夏美はぺろりと舌を出す。

「だってこんなの、滅多に使わないんだもん」

放課後。

姫月 怜香は、吹奏学部の根城である音楽室にいた。

「怜香、ちよつと音弱くない？」

目の前の友人から指摘され、怜香はアルト・サクスを下ろした。

「そうかしら？」

「うん。ひよつとして、調子悪い？」

「そんなことないけど……ただね、この楽譜ってブレスが少ないじゃない？ 強くすると息が続かなくて。多分そのせいだと思う」

首を竦める怜香。

「成程ねえ……先生に掛け合ってみようか、ダメ元で」

「そうね。麻里、頼め……」

（ ガシャン ）

怜香は耳の奥で、何かが碎ける音を聞いた気がした。

「麻里……今、何か……？」

「え、どうしたの？」

友人・麻里が、訝しんで怜香を覗き込む。

（音、ガラス……窓？）

怜香は何事か考え込んで、グラウンド側の窓を見た。

「すいませんけど、そっち側の窓、開けてくれませんか？」

「え、何を突然」

「寒いのに……」

窓側で練習していた一年生が不平を言う。

「いいから開けて！ ケガしますよ」

「はい……え？」

ばたばたと窓を開けた後、1人の男子が不思議そうな顔をした。

「姫月先輩、ケガって……」

そのとき。

彼の頭の真横を何かが通り過ぎ、目の前の怜香が咄嗟に麻里の頭を庇った。

その何かが教室のドアにぶつかるのと、怜香の眼鏡が床に達したのは、ほぼ同時。

すばやく麻里が眼鏡を拾い、怜香に渡した。

「ほれ、怜香」

「ありがとう」

怜香は俯いて眼鏡をかけ直すと、すっと立ち上がって周囲を見回す。

「皆、ケガないですね？」

部員達は無言で縦に首を振った。

「……すげえ、姫月先輩って何モン？」

頬を擦りながら、先程の男子が隣の友人に耳打ちする。

「ほら、あれだよ。先見。^{せんけん}予言者の家系ってやつだ」

「ひゃー、マジモン？ さすが蒼洋、魔導士だらけだ」

「お前だってそうだから招聘食らったんだろっが」

「まあ、そうだけどさ」

男子が溜息をついた頃、吹奏楽部の部長が拾ったものを手に窓から身を乗り出した。

「野球部ーっ！ 気を付けろー！」

部長が何か 白い野球ボールをグラウンドに放り投げる。

「姫月、また助けられたな。サンキュー」

「大したことじゃないですよ、これくら」

「いやいや、感謝、感謝だよ。よし、皆！今日はこれで終わりだ。解散！」

ぱんぱん、と部長が手を鳴らす。

緊張がほぐれ、学生特有のにぎやかさが復活する。

怜香は、微かに笑った。

木谷 潤一は、家路を急いでいた。

「姉さん、ただいま！」

「お帰り、潤」

ダイニングに入ると、姉が料理をしていた。

「もうちよっと待っててね。あと少しだから」

「うん。あ、洗濯物、たたもうか？」

弟のありがたい申し出に、彼女は背中越しに菜箸を振った。

潤一は奥の方にある自分の部屋で着替えてから、リビングの洗濯物の前に座り込んだ。

慣れた手つきで、数をさばいていく。

「御飯できたよ」

「ん、あと1枚……よし、終わりっ」と

両膝を両手で叩き、潤一は立ち上がった。

「ごちそうさまっ！」

潤一は食べ終わるなりちゃっちゃと食器を片付ける。その動作は淀みなかったが、姉の目は少し不満げに細まっていた。

「と、ゆーわけで……」

「こら待て」

早速部屋に飛び込もうと言うときに呼び止められて、潤一は恐る恐る振り返る。

「あんた、最近御飯食べたらずくに部屋に引っ込むけど、何してん

の？」

不思議そうな姉の問いに、潤一はにっこり笑う。

「ん？ ゲームだよ。学校の友達とやってるんだ」

「オンラインゲームってヤツ？」

「そうそう。“中央”で管理されてはいるけどね」

嬉しそうに話す潤一を見て、彼女はくすくす笑い出した。

「じゃあ、そのゲームをクリアするまで、晩の片付けを免除してあげる。その代わり、先にお風呂入るのよ。それと、内容を姉さんにも教えてね」

「わかった。サンキュッ、咲姉さん！」

平和な夜は、更けていく。

P r o g r a m 2 , C l e a r !

Program 2 School Life (後書き)

初稿は2001年なのは確実。ただしこの章がいつ終わったのかは不明です(苦笑)

アメリカ海外で反省の半分くらいを過ごしている子というのは、果たしてどのくらい英語が混じるものなんだろうね。

Program 3 6人の冒険者

魔方陣の上に、白く淡い光が集まり、少女特有の優しい形を創っていく。

「よしっ」

ぱちっ、と少女の眼が開く。

その瞬間、光は消え去り、少女のすべてが色付いた。滑らかな白い肌に生成りの服をまとい、その腰にはショートソードが吊られている。

「ゲーム開始だあ おはよ、皆」

服と共布の帽子を押さえ、ぴょん、と魔方陣から跳び出す少女。

「おっしや、これで4人全員揃ったな」

ナイフをいじっていた少年が立ち上がった。

「んじゃ、行ってみよー！」

拳を振り上げてはしゃぐ少女の姿に、3人の仲間が思わず微笑んだのは言うまでもない。

「ねえねえ、あれって村じゃないかな？」

「村ってゆーか、町？」

ジユンの発見に、サシャがツツコミをいれる。

「沙紗ちゃんが正解。あれはクレスタの町、だな。地図が合ってるや」

カズキが地図を見ながら言う。

「やっとまともな場所に着いたな」

ケイは少々疲れ気味のようだ。僅かだが、息が上がっている。

「何だよお前、若いもんがー」

カズキが笑うのに、ケイは不満そうに口許を歪める。

「おっかしいな、『魔導戦士』だからそんなに体力低いはずないんだけど」

「あ？」

カズキが、さも訳がわからない、と言いたげな顔を作った。

「お前、パソの前で何やってんだ？」

「え……？」

噛み合わない会話に、ケイの目が丸くなる。

「圭ーくん、和己ーくん！」

「2人ともーっ、早く早く！」

しかしケイとカズキの違和感は、サシャとジュンの急かす声でうやむやになってしまった。

クレスタの町は、喧騒と活気に満ち溢れていた。

「すっげえな。店ばかり」

カズキが感心した様に声を上げる。

「商店街みたいな感じかなあ？」

「ちょっと回ってみたいな。何があるんだろ？」

サシャも年頃の女の子。目にも鮮やかな果物や布地に心惹かれて
いるようだ。

「あ、でも装備を先にかくしないと、この先やばくない？」

ジュンの言葉に、サシャは残念そうな表情を作った。

「……やっぱり？」

「仕方ないさ。……おっ、ここだな」

カズキが楯に剣を重ねた看板を見つけて、一同は鍛冶屋に入る。

「やっぱり、出来るだけ良い物が欲しいよね、和兄」

「そりゃそうだろ。沙紗ちゃん、どうだ？ 良いモンあった？」

「うん」

手にした長剣を持ち上げて、サシャはポーズを取ってみせた。

「いーなー、ミスリルソード。でも高い……」

「ははは、隣国ならもつと安いんだがな」

気のよさそうな店主が、剣を磨きながら言う。

「隣国？ 1つの国じゃなかったんだ、この大陸」

ジューンがそう言うと、店主は小さく笑い声を零した。

「ああ、そうさ。ここはマール王国。隣はパスティア皇国ってんだ。代々女王が統治している、美しい国なんだと」

「行ったことはないんですか」

ケイの言葉に、店主は深く頷いた。

「国境辺りの森は特に危ないからな、行きはしないよ。もっとも、傭兵を雇うのにいくら払ってもいい、って奴等もいるから、俺達は品物に困らなくて済むんだが。そのかわり、とんでもなく高い値がついちまう品も出てくる」

と、サシャの持った剣を見た。

「それは、比較的安いシロモノだよ、お嬢さん」

店主の気取った言葉に、サシャが頬を赤らめる。

「気に入ったんなら、その剣をあげよう」

「えっ、でもお金……」

「見たとこ駆け出しだろう？ 人の好意は素直に受けておきなさい。ああ、あまり危ないことをしちゃあいけないよ。女の子なんだから」

「……はい」

はたして、サシャはタダでミスリルソードを手に入れたのだった。

どんつ。

「おっ、と」

全力疾走してきた少女の体当たりを受け、カズキがよろめく。

「あ、ごめんなさいっ……」

少女は辺りを見回すと、慌てた様子でケイの後ろに隠れる。

ふと少女の走ってきた方向を見ると、彼女と同じくらいの少女が走ってきた。

「失礼ですが、私と同じくらいの年頃の女性を見ませんでしたか？！」

身形のいい娘だ。仕立ての良さそうなワンピースを着て、長い髪

は邪魔にならないように高めの位置に結われている。

「……いや、見てないぜ」

少女の問いに、カズキが答えた。

「そうですか……ああ、どこにいかれたんですか、リーフ王女つたら……」

がくーっ、と見るからに落ち込み、とぼとぼ歩いていく。

少女が人ゴミの中に消えると、ケイは体の緊張を解いて、少しかがむ。すると、一体どうやってはりついていたのだろう、先の少女が背中から降りてきた。

「えへへ、ありがとう」

にこにこ少女は笑う。歩いていこうとする彼女の腕を、カズキが捕まえた。

「おっと……何が理由で城を抜け出したりしたんだ、リーフ王女？」

「ぎくっ」

「え、お姫様?!」

今更のように、ジウンが声を上げた。

「友達に会いに、ねえ……」

一通り彼女の言い分を聞いて、微妙なしかめっ面を続けるカズキ。

「な、何よう……」

町の中心にある噴水が、涼やかな音を響かせている。

その周りに置かれているベンチに座り、リーフ・マール・リヴィアス王女　このマール王国における、最高の王位継承者だ　は目の前の少年達を上目遣いで見上げた。

「あなた達には関係ないでしょ、ほっというてよね!」

「いや、『袖触れあうも多少の縁』とゆーだろ？」

「何それ？」

無意識に頭をかきながら発したカズキの一言に、リーフはきょとんとする。

「え〜っと……どういう意味だっけ？」

「バカ」

助けを求める様に見てきたカズキを、ケイは一蹴した。

「言葉自体間違ってる。それを言うなら『袖振り合うも他生の縁』」

……『ちよつとした出来事でも前世の縁による』って意味だよ。ぱつと意味出てこないんなら使うなよ」

「はは、わりわり……じゃなくて！」

ぐるりとリーフの方に向き直り、びしっと指を突きつける。

「お嬢！ お前さん、さつき『国境を越えて隣国へ行く』って言ったな？」

「う、うん」

よく憶えてるなー、と思いながらリーフは首を縦に振る。

「隣国つてのは？」

「パスティア王国よ」

「そこがほつとけねえ理由だよ。国境の森は危ないって聞いた」

「大丈夫、武器は持つてる」

「そりゃ狼1匹ぐらいなら平気だろうよ。でも2匹、3匹……5匹いたら？ 対処しきれるかよ」

「そ、それは……」

論破されてしまい、リーフは黙りこんでしまった。

「ほーら、な？ ムチャなんだよ。オレ達だって、1人じゃどこにもできねえんだぜ？ 諦めるか、誰かに護衛頼むかしろよ。その方が良いつて」

ぽんぽん、とカズキはリーフの頭を軽く叩く。

「……そこまで言うんなら……」

（諦めてくれたか）

下を向いて言うリーフの様子に、カズキがほつとしたのもつかの間。

さつきとは逆に、リーフがびしっと指を突きつけた。

「あなたたちについてきてもらおうわ！ 見たところ冒険者の様だし、

これなら文句ないでしょ!!」

「はあ!?!」

鬼の首を取ったようなリーフと呆れて物も言えずに髪をかき上げるケイに挟まれ、カズキはしばらく居心地悪そうに立っていた。

ところで、話に加わっていなかったサシャとジュンはというと…
…暢気に噴水で子供達と遊んでいたのだった。

「……本当にこっちで合ってるのかよ」

クレスタの町で手に入れた地図と、リーフから借りた方位磁針を
見比べながら、カズキがぼやく。

「コンパスは?」

「さつきからずっとぐるぐる回ってるぜ。ほら」

「あらら……」

サシャがのぞき込むと、確かにコンパスの針はぐるぐる回り続けている。

「最近、ずっとそうなの。この前も商隊が迷ってたのよ。太陽も見えないから、方位を推測するのも難しいのよね」

リーフが困ったように言う。

「え、今日だけのくもりじゃないの? この空って」

ジュンが空を指差した。

「うっん、最近はいつも雲で真っ白よ。……ん?」

何かに気が付いたリーフがきよるきよる辺りを見回すと、サシャ達は耳を澄ませて身構えた。

葉擦れの様な音がする。しかも、それがどんどん大きくなってくる。

「そっら、来た来た!」

カズキの一言で、皆が一斉に散開した。

ケイを中心に、前方をサシャとリーフが、後方をカズキとジュン

がそれぞれ固める。

「結界陣っ！」

光のドームが形作られると、それぞれが自分の武器を手にした。

「今回は梟か」

「行くわよ！」

1羽がサシャに襲いかかり、サシャは剣を横に薙ぐ。

リーフはサシャを援護するように、三日月形の武器を振り回す。

「頭、氣イ付けろよっ！」

カズキはそう言つと、ダガーから持ち替えたブーメランを飛ばす。

「ギヤアッ！」

一方の羽を刈り取られた1羽が、地に落ちた。

サシャがとどめをさす。

「風牙！」

ジュンが風の刃を飛ばす。が、梟たちに易々と避けられてしまった。

「風刃乱舞っ」

今度はケイが。何羽かは傷を受けたが、それだけ。

「あ、あっち行け、こら！」

「きゃあ、いたいいたい！」

前線の2人は、自分達にたかる梟を払うのに必死だ。

その内の1羽が、何を思ったかケイに向ってきた。

「うわっ！」

（避けられない……！）

ケイは思わず、目をつぶってしまった。

そのとき、何かが風を切る音があたりに響いた。

「ピーッ……！」

何かが突き刺さる音。次いで、断末魔の悲鳴。

目を開いた時には、すでに梟は落ちていた。

「矢……？」

仲間の中に、弓矢を使う者はいない。

「一体誰が……」

2本、3本と飛んでくる。今度は火矢だ。

正確に、鼻に当たっていく。

「ほらほら、ボサツとしない！ 今のうちだよ」

「援護します。こちらは気にせず、集中してください！」

真っ正面から走ってくるのは、2人の少女。

1人は弓を左手に持って、髪をポニーテールに結わえている。

もう1人は火矢に使ったらしい火を、右手に灯していた。

「ありがとうっ！」

敵方に隙が出来て落ち着いたサシャは、一言告げると高々と跳びあがり、鼻を薙ぎ払う。

「行きますっ、火炎弾！」

「全てを焼き尽くす炎の精よ、私に力を！」

間髪入れず、少女とリーフの魔法が炸裂した。

全てが地に伏すまで、それほど時間はかからなかった。

「早かったね、兄ちゃん」

「さっきまであれだけ苦労してたつてのに……」

ジュンとカズキがポツリと呟く。

「あー、終わった終わった。人数いるとラクだねえ」

ポニーテールの少女が、思いつきり伸びをしながら言った。

「倒したの、殆どあんたじゃないか」

ケイがすねたような表情で、髪をかき上げる。

「そう言えば、危なかったね、カレ」

「仕方ありませんよ。あれは結界を突破しようという本能でしょうから」

自分たちが加勢するまでのケイの様子を思い出した相棒に向かい、魔道少女は軽く肩を竦めて見解を述べる。

「どういうこと？」

ジュンが不思議そうに首を傾げた。

「えっと……結界というものは、外からは入れるけど、中からは出

られないものなんです。しかもその解除方法は、術者が自分から解除するか、さもなければその人を倒すか」

「じゃあ、あの梟達ってこの場から逃げたかったのかな」

少女の丁寧な返答に、ジュンは更に問いかける。

「それもあるでしょうけど……限られた空間で有利になるのは

……」

少女の講釈がとうとうと続く中、サシヤはケイにそつと耳打ちした。

「……圭くん、そうなの？ 結界って中から出られないもの？」

「この世界では、多分な？ 実際の、俺達が使う『結界』……『魔法陣』は基本的に出たり入ったりは自由さ。攻撃用に敷いた魔法陣なんて特にな」

「攻撃用？」

「ああ。俺、左手に丸い痣あるだろ？ 二重円に三角2つの星型がくつついたやつ。あれはね、結界張るより攻撃のほうが得意な雛型なんだよ」

「……ふうん」

納得したのか、しないのか。ともかく、サシヤはそのことについて考えるのはやめた。

ふと気が付けば、講釈は疾うに終わり、雑談に移行しているようだ。

「そついえば、あなた達は？」

「あ」

振り返ったサシヤが問うと、ポニーテイルの少女が、握った右手を左の掌に軽くぼんと打ちつけた。

「自己紹介、まだだったね。ワタシはナツミ。見ての通りの戦士だよ」

「レイ、です。魔導士です」

（ナツミにレイ……まさか、ねえ……）

頭の隅に名前が引っかかり、サシヤは人知れず思案する。

「俺はケイ」

「オレはカズキだ。よろしくな」

「ジユンっていうんだ」

「リーフ・M・リヴィアスよ。隣国に着くまでパーティーに入れてもらってるの」

「あたしはサシャ。宜しくね」

とりあえず、自己紹介（といっても名前だけだが）を終わらせ、一行は先に進むことにした。

P r o g r a m 3 , C l e a r !

P r o g r a m 3 6人の冒険者（後書き）

初稿は2001年9月25日最終。そしてここでノートも1冊目が終わりました。

Program 4 <基層> (イエソド)

「あーあ、I'm SO tired! (すごく疲れた!)」

そう言って、ナツミは宿のベッドにダイブした。

「行儀悪いよ、ナツミ。靴くらい脱ぎなさい」

すかさず母親のようにたしなめるサシャの言い方に、レイとリーフは思わず吹き出した。

「むうー」

ナツミは口唇を尖らせる。

「サシイってば、マミイみたい」

その言葉に、旅装を解いていたサシャの手がふと止まった。

「その呼び方……どこで聞いたの」

「Ha?」

きょとんとするナツミ。一拍置いて、その顔は見る見るうちに喜色に染まっていった。

「You are "Sassy"? 如月 沙紗?!」

「う、うん」

勢い込んで迫ってくるナツミに、サシャは咄嗟に頷く。

すると、がばっとナツミが抱きついてきた。

「うわあっ、嬉しい! こんな早く会えるなんてっ!」

立ち上がって、沙紗に抱きつくナツミ。

「わ、わ、わ、こら、夏美! 苦しい離せえ!」

サシャがナツミを闇雲に叩く。

そんな2人を見て、リーフ達は自分達のベッドの上で笑い転げた。そこに、木製のドアをノックする音が響く。

「おーい、お嬢たち。下に情報収集行くぜ」

カズキの声だ。

「い、行きたいんなら、助けてえーっ!!」

切羽詰った少女の声。

ドアを開けたカズキが見たのは、ナツミにしっかりと抱き締められ、頬に擦り寄られているサシヤの姿だった。

サシヤを何とか解放させ、宿と直結している大衆食堂に降りた頃。どうやら夕食時のようで、そこにはすでに人が溢れていた。

「おお、すげえな」

おもちゃを見つけた子供のように目を輝かせるカズキ。

「いらっしやいっ！」

忙しなく動き回るのは、恐らくこの食堂の看板娘だろう。

その様子を見てか、ジュンがくすつと笑う。

「作りこまれてるね」

すぐ側でその言葉を聞いたサシヤは、不思議そうに首を傾げた。

「だってそうじゃん。これ、ゲームでしょ？ しかもベータ版。そんなに作りこむ必要はないのに」

くすくすと笑いながら言う少年に、そう言えばそうだな、とカズキやナツミが頷いた。ケイとサシヤだけが訳も解らず、その目が不安そうに互いを見、泳ぐ。

その時。

すれ違った男の半身と、ジュンの肩がぶつかった。

「あ……つと」

体の軽いジュンが後ろによるめいたにも関わらず、言葉もないまま男は立ち去ろうとする。

「……おい、今何やった」

質問、というより、『何かをした』と言う確信を持ったケイの声に、男の足が止まる。

「何やったって、訊いてるだろ？」

「……まさか？」

サシヤの小さな声に、ケイがほんの僅かに男から目を逸らしたその時。

「あっ！」

「こら待て！」

男が駆け出し、カズキも走り出した。咄嗟にそれを追ってナツミが走り出す。

「どうしたの?!」

「何ですか、一体?」

まだ訳の解らないリーフとレイがケイに問う。

「スリだ、行くぞ皆！」

ケイも2人を追って走り出し、一同は食堂を飛び出した。

恐ろしい程の速さで、男は街中をすり抜けていく。

カズキ、ケイ、ナツミの3人は、つかず離れず男を追いかける。

「ちつくしよ、鬼ごっこ、かよ……」

カズキが途切れがちの声で呟いた。

後ろから残りの4人がついて来ているのが判る。

振り返って気遣う余裕はない。

僅かずつ、だが確実に、互いのペースが落ちてくる。

しかし男の足は止まらない。

やがて景色は町のものから林のそれへと変わり、石畳は舗装されていない土の林道へと変わる。

「きゃああっ！」

「夏美！」

転んだらしい、痛々しい音に、ナツミの甲高い悲鳴と、サシャの声。

「お2人は先に行つて下さい！」

レイの声も飛ぶ。

カズキは舌打ちする。

「圭一も気を付けろよ、足元」

しかしケイが応える前に、カズキの視界からその長身が消えた。

「う、わあっ!!」

言われた矢先に、張られた紐に引つ掛けて派手に転ぶ。

飛び込み前転のようにうまく転がったものの、質量からくるダメージは相当のもののようなのだ。

「っ、先に行け!」

「おう、無茶すんなよ!」

親友の無事な姿を確認することなく、カズキの姿は見る見るうちに宵闇に紛れていった。

それを見届けると、ケイは腹立ち紛れにナイフを取り出し、まだピンと張られているブービートラップに八つ当たりした。わあっ、という声が少し離れた藪の中から聞こえる。それは、あの男には仲間がいるということを教えていた。

それからおざなりに長衣ロブのほこりを払い、ケイはようやく立ち上がった。

（背中が痛いやら引つ掛けた方の足が痛いやら……散々だな、チクシヨウ）

「圭くん!」

「ああ、沙紗」

目を上げると、少女たちとジュンが駆けてきた。

「……何してたの」

「転んだ」

訝しげなサシャにケイはあっさりと返す。

「リーフ」

「何?」

「あんた、街に戻って警察……違うか、警備隊か誰か呼んできてくれ」

途中を言い直しながらのケイの言葉に、リーフは唇を尖らせた。

「わたしだけ仲間ハズレ?」

「流れ者の俺達より、仮にも王女のおんたの方がよっぽど信頼されるだろ? 頼む」

「どうにも途中が引つかかるけど……わかったわ、すぐに戻ってくる。そこで待っててよ！」

名残惜しそうにきびすを返し、少女は町に向かって駆けて行く。

普通の話し声ならもう聞こえないだろう所まで言ったのを見届け、

「よし、行こう」

と、ケイが頷きながら言った。

「ええっ?!」

「な、何で何で!」

ナツミとジュンが抗議の声を上げる。

レイは逆に、納得したように頷いた。

「……それが一番良いでしょうね」

「だろ? リーフが足手纏いにならないとは限らないからな」

ケイの言葉に、2人は更に抗議の声を強めた。

「夏美、ジュン君。リーフが怪我したらどうする?」

サシャが口を開くと、ぴたりと抗議が止まった。

「Oh, I see... (判った……)」

「僕等のせいになるのか」

ようやく納得したらしい。

「でも良いワケ? リーフ、『待ってて』って言ってたじゃない?」

眉根を寄せて、ナツミがケイを見上げる

「俺は同意してないから。ほら、行くぞ」

長身の少年はしれつと言うと、さっさと歩き出した。

ナツミその後ろ姿を見て、サシャの耳元でポツリと呟く。

「……策士だ、こいつ」

一方、その頃。

カズキは男を追って、大きな建造物の中を歩いていた。

「あのヤロ、何処に行きやがった……?」

確かに此処まで追ってきたのだ。居ないはずがない。

月明かりが差し込む薄暗がりの中、少年の影だけがゆっくりと動

く。

動くものは自分だけ、聞こえるものは自分のものだけ。

（足音うるせえ……）

そう思いながら、カズキは片耳に手を当て、足元を見た。

目に入ったのは、石造りの床とそれを踏みしめる自分のブーツ。

肩を竦めて左足のダガーをベルトごと外し、腰回りに留め直しながら周囲を見渡す。

その視線が、ピツタリと止まった。

「……………え？」

突き当たりの壁の石が、光っている。

「マジかよ、おい」

呆然と呟きながら、少年は歩み寄って手を触れた。

目を焼かないその光は、石から離れるように消えて、右上の石に移る。

「……………？」

首を傾げ、また光に触れる。光もまた離れ、別の場所に移る。

右手の方へ　　神殿の中心へ。

追いかけてここは唐突に終わった。

別の突き当たりで、光は動かなくなったのだ。

「あれ？」

何度つついても、何の反応も見せない。

「せっかく楽しくなってきたのに」

心底がっかりした、という風に呟くカズキ。

ふと思いついた、『押してみる』という選択肢を実行しようと、もう一度手を伸ばした。

「何をやっている！」

低く響く、男の声。

カズキは反射的に、右手をダガーの柄に当て、臨戦態勢で振り返った。

現れたのは3人。ローブを着てはいるが、どう見たって目つきは

普通の神官の類ではないだろう。

「民間人が入って良い場所ではないぞ」

体格の良い男が、高圧的にカズキを見下す。

「何だよ。まだガキじゃねえか」

右側のひよろりとした男がランプを目の前に翳す。

「へっえー、えらい可愛らしい顔してるじゃねえか。娼館に売った
ら高いぜえ、これは」

たじろぐカズキを見て男が発した、笑い声を含む下卑た声が袋小路に反響する。

「こつ、こいつだ！ 俺を追ってきたのは」

最後の小柄な1人が、声を上ずらせて後ずさった。

「へえ、こいつがかよ。それじゃあ、見過ごすてはねえなあ」

丈高の男は舌なめずりをする、右手をカズキに向けて握り込んだ。
だ。

途端に、その手の甲を傷付けかねない勢いで金属の刃が飛び出す。

（来るか?!）

カズキもダガーを鞘から引き抜き、構える。

「オラアッ!!」

男は勢い良くカズキの顔目掛けて右手を突き出す。
ガッッ。

対して少年は、しゃがみ込む要領でそれを避けた。そのまま両手を
床につき、それを軸にして、中央の男に足払いをかける。

「うおっ」

「わああっ!」

ものの見事に後ろの男を巻き込んで転ぶ。

「こ、こいつめ!」

ローブ男は身を起こし、カズキを睨み付けた。

「ルイー!」

そう呼ばれた爪男が、壁から刃を引き抜いて和己に斬りかかる。

（『コチラへ!』）

カズキの耳に、頭の中に、少女のものらしい声が響き渡った。
気を取られて反応が遅れ、咄嗟に立ち上がった少年の頬に紅い線
が走る。

逃げ遅れた栗色の髪が数本、はらはらと石の床に落ちる。

（『ヒカッテル石二剣ヲ！ 早く！！』）

声に言われるまま、カズキは右腕を振り上げ、背にしている石の
壁を、己の胸部と同じ高さにある石の光を突き刺した。

不意に、背中へ服越しに伝わっていた冷たい感触が消え、カズキ
はものの見事に後方回転する羽目になった。

「うわあっ、いててて……」

四つん這いの状態で頭をさする頃には、既に壁は元通り存在して
いた。

「どうなっただよ？」

訳が判らない、とでも言いたそうな表情を浮かべ、カズキは片膝
を立てて座り込んだ。

（今度は、逆に静かだな）

先程とは比べ物にならない。

その静寂は、突如響いた鎖の擦れる音で破られた。

カズキはびくり、と肩を震わせ、恐る恐る背後を振り返ると……。

「……あたしの声、聞いてくれたの？」

そこに居たのは、立ったまま礫にされて両手首を鎖と枷で戒めら
れた少女だった。

「……誰だ？」

「セラフィータ。貴方は？」

「カズキ」

「そう。……こちらに」

じやらり、と鎖を揺らし、セラフィータは手招きした。

そろりとカズキは立ち上がり、壁の少女に近づく。

「助けてくれて言ったの、お嬢、だよな？ どうすれば？」

「手枷に窪みがあるの、判る？ そこに石を填めるの」

「石？」

少年は首を傾げる。

「そう」

少女は少し考えるようにすると、辛うじて動く手で真正面の祭壇を指し示す。

「あちらの祭壇に、手をかざしてちょうだい。大丈夫、すぐにわかるわ」

有無を言わさぬ口調。カズキの方も、抵抗なく祭壇に向かう。

「だって、あなたはそのために呼ばれたんだもの、『わたし』に」
その声は恐らく、小さなものだったろう。だが石造りの建物と言
うものは小さな音すらも反響し、増幅し、彼方へと届ける。

え、とカズキが振り向きかけたとき、祭壇からのまばゆい光が彼の目を眩ませた。

「サシャ！」

歩きながら何気なく顔を上げたジュンが、大声でサシャの名を呼ぶ。

「あれ！」

慌てて指し示される方向に、皆が目を向ける。

そこには、薄く紫がかった光の柱があった。

「……That's Jacob's ladder」？（あれって、天使のはしご？）

「そんなわけではないでしょ、第一今は夜よ？」

ナツミの言葉に、サシャがさかさず突っ込んだ。

レイは緊張した面持ちで、じっと光を見つめている。

「Hey, what's wrong?（ねえ、どうしたの？）」

ナツミは後ろを振り返り、レイに声をかける。

「え？ あ、何ですか？」

細い肩をそびやかせ、鮮紅色の瞳を瞬かせるレイ。

「どうかした？」

「あ、何でもないです」

覗き込むナツミから、少し視線をそらす。

「really? (本当?)」

ナツミは心配そうだ。

レイは頷き、目を細めて微笑んでみせた。

「とにかく、行ってみませんか？ 道の先ですし、カズキさんはそこにいるかもしれませんよ」

誰も、異存はなかった。

「……ねえ、ホントにここに兄ちゃんいると思う？」

道の先に現れた石の建物を見上げ、ジュンがポツリと洩らす。

「それを確かめに来たんだろ。先にめげるなよ」

軽く少年の頭をこづくケイ。

「だって、すごい静かだよ？ 兄ちゃんどころか、誰もいなさそう」

「……いえ、少なくとも管理する誰かはいるようですよ」

そう言っただけレイは戸口に近付き、扉にはまっているガラスを覗いた。

「戸のガラスも綺麗なものですし……そのクモの巣だって何も掛かってないでしょう？」

と、すぐそばの玄関灯を指差した。

「昨日か今日か……それぐらいに出来たものだと思いますよ。」

クモって、1日で巣を作れるんだそうです。それだけなら数日前って予想も立ちますけど、森の前なんでその予想じゃ何か掛かってないとおかしいと思うんですよ」

どうですか？ と首を傾げるレイ。

「成程な。で、どうする？」

扉に近付いたケイが、皆の顔を見回す。

「どうするって、そりゃやっぱり入るんでしょう？」

「げえっ、入るのオ?!」

「ちょ、ちよっとワタシ嫌かも……」

離れ気味の3人が騒ぎ出す。

「こういう時って、リーダーが最終決断下すんでしょうけど……私達のパーティって、誰がリーダーなんでしょうね？」

ナツミとジユンの騒ぎ振りを眺めながら、レイが切実な問題を口にした。

ぴたっ、と騒ぎが止む。

「……い、言つとくけど僕はムリだよ？」

両手を振ってジユンが否定する。

「ワタシだって無理だよ。サシイにツツ込まれない自信ないし」
肩を竦め、ナツミはサシヤを見遣った。

「ワタシ、サシイが一番適役だと思っただけど」

ナツミに倣って皆がサシヤに視線を集めると、サシヤはおろおろと仲間達を見回した。

「え、あ、あたしは圭一くんの方が適任だと思うんだけど」

「俺ムリ。バンドでもサッカーでも聞くほうだから」
と、ケイはレイを見る。

「私になったって、皆さん聞かないでしょ」

苦笑するレイ。

「消去法でも適性でも、サシヤさんが一番ですよ」

「あう……」

暫くの間、サシヤは逃げ腰で皆を睨んでいたが、やがて軽い溜息と共に肩を落とした。

「わかった、わかったわよ。なれば良いんですよ、リーダーに」

額に手を当て、頭を振るサシヤ。

「さ、リーダーさん。決めて下さい。入るか、入らないか」

レイがサシヤに手を差し出す。

サシヤは扉に近寄りがてら、レイの手を軽く打った。

「決まってるじゃない、入るのよ」

ニツと笑ってレバーハンドルに手をかける。

勢い良く回そうとすると……。

「うぎゃっ！」

思いつき扉が開き、見事なまでにサシャの顔面にヒットした。ばらばらと出てきたのは、明らかにローブが似合っていない男が3人。

その中で一番後ろに居る1人は、どこかで見た覚えのある顔だ。5人に目もくれず逃げようとするのを、サシャに先頭の首根っこを捕まえられ、立ち往生するハメになってしまった。

「人の鼻っ柱折る勢いでドアぶつけといてえ……何も言わないでどっか行こうってえっ?！」

怒り心頭といった顔で、サシャは怒鳴る。

「う、わ、ごめんなさいごめんなさいっ! もうしないからどうかーっ!!」

何を勘違いしたのか、一番後ろに居た小柄な男 確か、サシャ達が追っていたのは彼だったはずだ が、ジュンの財布と袋に詰めた何かをサシャの足元に放り出し、真後ろで土下座した。

暫く冷視していたサシャは、無言で手を放す。すると、3人はわき目も振らずにくんずほぐれっ逃げていった。

後には僅かな木々のそよぎだけ。

怒鳴ったはずのサシャも、他の4人も、その様子に呆然とした。

やがて小さく嘆息すると、サシャは腰を折って足元の戦利品を拾い上げ、財布の方をジュンに投げ渡す。

「とりあえずこれは持つていくとして……改めて、入るわよ」

何事もなく、大きな広間にたどり着く。

「どれ程の広さかは判りませんが……ここが建物の中心だと思えますよ」

レイが、やけに高い天井に開けられた天窓を見上げて言う。

広間の中程から見渡してみると、扉の正面には祭壇らしきものがあり、大きなタペストリーが飾られていた。

「That's a chapel? (礼拝堂?)」

「かなあ?」

顔を見合わせて首をひねるナツミとサシャ。

見に行こうとサシャが一步踏み出すと、祭壇の方から突風が吹き荒れた。

同時に派手な音を立てて、両開きの扉が閉まる。

(……おかしい!)

普通、風というものは通り道が無ければ止む。扉が閉じた今、風の道は殆ど無くなったのも同然なので止むはずなのだ。

誰よりも前に立っていたサシャは、風に煽られそうになったのを踏み止まり、右腰に吊った剣の鯉口を切り、柄に左手を当てた。

眇めた瞳はじつとタペストリーを見据えている。

その時、天窓からさあつと満月の光が入って来、タペストリーを照らした。

同時に風が止み、痛い程の沈黙が流れる。

それでもサシャは、タペストリーに描かれた獣から目を離さない。静かに、左手を握りこむ。

『ああーあ、これだけ脅せば、逃げると思ったのに』

不意に、少女のものらしい残念そうな声が響いた。

驚いて周囲を見回す5人。

何気なく顔を上げたレイは、タペストリーを見て怯えた表情で口元を押さえた。

風はもう止んでいるのに、波打ったのだ。

薄く紫がかった光が、布の上に波紋として広がる。

「何が起こるって言うんだ……?」

先程からの緊張でからからになった喉を無理矢理湿らせ、ケイが掠れた声を出した。

波紋は不安定に脈動を見せる。

一際強くなった時、中心部から「何か」が出てきた。

サシャは万が一に備え、皆を背に一步下がる。

その「何か」は、初め猛禽に見えた。

しかし、それはすぐに全員の頭の中で否定される。

翼の後ろに少女を乗せたその獣の後半身は、まさしくライオンのそれだったからだ。

「あれ……グリフォン？」

小さくレイが呟く。

「まったく、いつまで経っても人間って単純よね」

馬鹿にした様な物言いの少女は、うつとおしそくに長めのショートヘアを掻きあげると、嫣然と微笑んだ。

「誰?!」

「初めまして、そしてさようなら。私はミラ……貴方たちを阻む者」少女はサシャに答えてそう言っていると、すいっと右手でサシャ達を指した。

「……やっておしまい」

冷たく響く声に、グリフォンは身体を宙に浮かばせた。

ヒュウツ、と音がする。その音に素早くケイが反応し、サシャの前に出た。

「結界陣っ!」

取り出したスティックを長くのばして左手に持ち、腕を伸ばして目の前にかざすと、その腕に右腕を交差させ、間一髪で魔方陣を發動させた。

グリフォンはぱかっとなぜか、青白い光弾を2発連続で放つ。

ケイは片目を閉じて衝撃に耐え、着弾の光に隠れてナツミが弓を引く。

やすやすと矢を避けられて射手が舌打ちするのも束の間、尖った爪が目的目がけて振り下ろされ、狙われた剣士は自らの剣を引き抜いて受け止めた。

「踏み潰しちゃえ」

ミラはくすくす笑ってグリフォンに命じる。

サシャは床とほぼ水平になった剣を、右拳も使って支える。

すでに膝が震えている。

「潰されて……たまるかぁーっ！」

そう叫ぶと、右手を外して相手の足を滑らせ落とした。

だが反撃に転じようとした瞬間、剣ごと鳥の足で蹴飛ばされてしまっ

「ぐあぁっ！」

小柄な体は仰向けに倒れて2、3m程床を滑り、サシヤは体をくの字に折って咳き込む。

「沙紗っ」

慌ててケイが駆け寄り、抱き起こした。

プロテクター 女性剣士用の防具だ を着ているとはいえ、

衝撃はかなりのものだったらしい。サシヤは苦しそうに胸を押さえ、大きく息を吐いた。

「火炎弾っ」

高い声が響いてロッドが軌跡を描くと、炎の塊がグリフォンの目元で炸裂した。と同時に、背にしていた扉も閃光をはらんで吹き飛んだ。

「レイ、何したんだよ！」

「い、今の私じゃないです！」

慌てふためくジュンとレイ。

「なあんだ、もう出て来ちゃったの？ もう少しくらい時間稼ぎ出来ると思ったのに」

「へっ、ご期待に添えなくて残念だったな。ったく、人の都合も聞かずに閉じ込めやがって」

吹き飛んだ扉の向こうには、チャラチャラと手の中で小さな石を弄ぶカズキと、メイスを握り締めたローブ姿の少女が居た。

「ふん、誤算だったわね。あんた、『練成術』持ってたんだ」

グリフォンに跨った少女の顔から、初めて笑みが消えた。

「偶然気付いただけだけだな。ご期待に添えず残念、ってヤツか」少女とは逆にニイツと自慢げに笑うカズキ。その後ろから、1人

の少女が顔を出した。丁寧な刺繍を施された長衣ローブを来ているからには、彼女こそがこの建物の主人だろう。

「セラフイータ様……どうかお静まり下さい！」

高めの少女の声が、僅かの間場を支配し、消えてゆく。

その間にカズキは投石袋　羊飼いが使うような、小さな袋に紐が2本くつついたもの　に石を引つ掛け、紐を掴んで回し始めた。クツ、と笑うミラ。

「バツカじゃないの？」

その言葉を合図としたか、カズキは十分に遠心力を持った投石袋の紐を1本だけ手放し、石を放り出す。

まるで意思を持ったかのように飛んでいくそれは、ミラのすぐ傍で真つ白に輝いた。

「きゃあぁっ！！」

その光は、サシャ達7人の目は焼かず、ミラと名乗る者の姿を容させた。

濃い灰色をしていた髪は月明かりに淡く透き通った銀色に変わり、苦しそうに顔の左半分を押さえる手の隙間から垣間見える瞳は驚くほど鮮やかな紫を見せる。

「く、そお……覚えてなさい！」

忌々しげに言葉を吐くと、グリフォンの体が輪郭を失くした光になった。

対して少女は糸が切れたように意識を失い、現実味をなくした獣の上から落下する。

「あっ……」

一同が動き出そうとした瞬間、少女の背には淡く紫に色付いた翼が現れた。

落下速度は緩まり、足から床に横たわる。

ふつ、と光が消えると、光源は満月の光のみになった。

「ん、う……」

翼を生やした少女が、目を覚ます。

「セラフィータ様っ！」

名を呼びながら駆け寄るのは、戸口で懇願していたローブ姿の少女。

「……アリス？」

目にかかる前髪をかき上げ、セラフィータは目を細める。

次いで、6人に目を向けた。

「貴方たち……」

驚いたような声色。

しかしすぐに、表情がぐっと引き締まる。

「とうとう来たのね。待っていたわ、貴方たちを」

6人が改めて通された部屋は、先程戦闘の場となった祭室とは違い、随分と明るくされた場所だった。

ふかふかのソファに並んで座り、ナツミはそわそわと落ち着かなげに周囲を見回していた。

「夏美」

たしなめるような声にサシャを見る。彼女は今、上着を脱いで防具を外し、借りた毛布を肩に羽織っていた。

「もうちよつと落ち着いて」

「だあって……」

頬を膨らませて背凭れに体を預け、栗色の髪をいじり始めるナツミ。

「ごめんなさい、待たせて」

部屋の扉を開いて姿を見せたのは、薬瓶を抱いたセラフィータと、ティーセットを持ったアリスだ。

「どうかしら？ さっきの治療術で、少しは痛み引いた？」

「少しだけ……」

「ごめんなさいね、水術は得意でなくて。薬湯を持ってきたわ……痛みと炎症に良く効くから、どうぞ」

「ありがとう」

サシャはセラフィータから薬を受け取り、口を付ける。

「ぐいっといっちょえ」

見ていたナツミが茶々を入れ、ちろりとサシャが横目で睨む。

「じゃあ飲んでみなさいよ。ほらあ」

ナツミへと瓶を傾けてみせるサシャ。他の4人とアリスは、その様子にふと微笑む。

「セラフィータ様のお話が終わりましたら、ココアでも飲んでお休み下さいな」

低めのテーブルに紅茶を入れたカップを5つ、主人の為に1つ用意しながら、アリスは笑って言った。

「出来れば今欲しいかな、これ苦そうだし」

向かいにセラフィータが座るのを見ながら、サシャは苦笑いした。「少し話を聞いてくれたら、すぐに出させるから」

「そうだな。今もらって体あったまったら寝るだろ、あんたの性格だと」

セラフィータとケイが2人でサシャをなだめる。

サシャが大人しく薬を半分ほど飲むと、カズキが口を開いた。

「……で、何なんだよ、話って」

セラフィータが、軽く微笑む。

「その前に確認したいことがあるの。この世界のこと、どれくらい知ってる？」

6人は、何か情報はあったかと考えをめぐらせた。

「名前……くらいは」

「同じく」

一番初めにしたことが魔方陣の文字を読んだことであるケイと、傍にいたサシャが最初に答えた。

「マール王国とパスティア皇国が隣同士で、パスティア皇国の特産品がミスリルだってことー！」

ジュンは元気良く手を挙げて発表する。

「召喚魔法があるってことは知ってるぜ」

隣の従弟を小突いて答えたのはカズキ。

「んー……ほとんどナイ、です」

しかめっ面でこめかみを押しながら、ナツミが答える。

「魔法を使える人と使えない人が居るってこと位は知ってます」

レイが静かに答えた。

「……つまり、皆殆ど知らないって事が……」

一人掛けのソファに座ったセラフィータは、肘置きで頬杖を突いて考え込んだ。

「質問形式にしましょうか」

苦笑し、両手を広げる。

それを合図にしたように、落ち着かないそぶりを見せていたナツミが元気良く手を挙げた。

（手を挙げなくても良いんだけどねえ……）

「何かしら？」

「キミは、何者？」

真剣な顔でナツミが言うのと、セラフィータの表情がふと引き締まる。

「私はここ<基層>（イエソド）で世界の守りの一角を司る、闇天使セラフィータよ」

そう言うと、セラフィータは微笑んだ。

今度は6人がきょとんとする番だ。

「……天使？」

流石のサシャも目を丸くする。

「まあ、役職名ね。ここでは最高位の神官だと思って。他には？ スッ、とサシャが戸惑いがちに手を挙げる。

「結局の所、ここは一体どういう世界なの」

セラフィータの顔から、笑みが消える。

「12の神殿を守りの要とする、双子の世界の片割れ」

「……は？」

「貴方たちは12人の天使と神の加護を受けて、最後の神殿を開く

のよ」

「冗談だろ、と言いかけ、少女の真剣な表情を見たケイは口を噤んだ。

「後は…進む間においおいわかってくるでしょ。もう休むといいわ」
そう言つと、呆然とする6人を残してセラフィータは立ち上がった。

「魔方阵を発動させておくわ。目が覚めた頃には気力も体力も回復してるはずだし、安心して休んでちょうだい」

サイドテーブルに置かれたランプの1つに火を入れ、少女は廊下の暗がりには消えた。

（彼女、何を言いたかったの……？）

暗がりを見つめ、サシヤはぼんやりとそんなことを考える。

「サシヤ」

そつと肩に手を置かれるまで、皆が既に立ち上がっているとは気付かなかった。

「どしたの、どこかイタイ？」

心配そうなナツミ。

いつものように、顔を覗き込んできて問い掛けてくる。

「ほんの少し、ね？ 大丈夫だよ」

サシヤは微笑し、皆に倣って席を立った。

真正のものに近い闇の中、サシヤはココアで満たした暖かなマグカップを手にして、ベッドの上に体を起こしていた。

案内された寝室は当然のことながら男女で分けられ、同室の女子2人は既に熟睡している。当然ながら、起きているのはサシヤだけだ。

彼女は今、ココアを少しずつ喉に通しながら、セラフィータの言葉の頭の中でリピートしていた。

「変な、話……」

ぼつりと、口の端から洩らす。

（学校でユーザーが見つかったら……訊いてみるのも良いかもね）
そんなことを考えながら、カップをサイドテーブルに置いて布団
に潜り込んだ。

P r o g r a m 4 , c l e a r !

P r o g r a m 4 < 基 層 > (イ エ ソ ド) (後 書 き)

初稿はおそらく2001年の9月以降。

何故2冊目に日付を書いていなかったのか……!!

Program 5 Research

A . M . 8 : 0 0 .

普段なら学校に行っているだろうこの時間に、高村圭一はテレビニュースを見ながら遅めの朝食と洒落込んでいた。

とはいっても、家に居るわけではない。自分の場所だが、自宅ではないのだ。

広く取られたリビングには楽譜が散乱し、ソファの上にはクラシック・ギター 聞くとところによると、エレキギターと構造が同じらしい が放り出されている。散々たる現状だ。

(この收拾、どうつけよう……)

「…………… 沙紗に頼んじゃおうかなあ」

目の前の状況を見て考えたことに、言葉は自然とつながった。

その瞬間、誰に聞かれたわけでもないのに少年の頬が紅く染まる。誤魔化すかのように、慌てて時計を見る。アナログ時計は、その長針をすでに全体の4分の1進めていた。

「げっ、やばい！ あと15分!？」

ワザとらしく妙に大きな声を上げ、トーストの残りを口に押し込んで身支度を始める。

(今日は午後オフだし、終わったら学校行くぞ、絶対!)

忙しい中でも、少年の頭の中は至って平和のようだ。

「よーっす、沙紗ちゃん」

制服に自前のコートを着込んで学校までの往路を急ぐ沙紗に、元気良さそうな自転車少年が追いつく。

「おはよ、和己くん…… って、サッカー部の朝練は？」

「今日は無し」

器用に沙紗の横にぴったり寄って、これまた器用に速度を合わせる。

「圭一くんは？」

首を傾げる沙紗に、和己は携帯電話を渡す。

「？」

くるくると、二つ折りの携帯電話を回して眺める沙紗。

和己は思わず吹き出す。

「何してんだ」

「いや、ちよつと……こう、だよね」

ぱかつ、と軽い音を立てて開き、沙紗はディスプレイを見つめた。

「まさかケータイ持っていない訳じゃねーだろ？」

「実はその『まさか』。……あ、メール来てるよ」

「この時間なら、多分圭一だな。見ていいぜ」

和己が自転車を降り、押しながら沙紗の手元を覗いた。右手に持ち、左手でボタンを押していく動作をながめやる。

「コードレス使ってるみてえだな、そのやり方」

「携帯電話使ったことないしね」

手元を指差され、ははつと苦笑いする少女。

「外での連絡手段無いんじゃないやねえか？」

「手段自体はあるよ。モバイルパソコン持ってるから、あたし」

沙紗はそう言いながら、開封されたメールを見た。

＜午後に行く。連絡よろしく。 K＞

“ K ” は “ 圭一 ” の頭文字だろう。

「…… K・TでもT・Kでもなく、Kですか……」

「判りづらいよなあ！ いつも言ってるのに直さないんだぜ？ それ」

同じイニシアルを持つ少年はけらけらと笑い、隣の少女を急かして学院へと向かった。

時は移ろい、正午。

教師が風邪をひいて休んだ為に、沙紗がいる高等2年A組は4限目が自習となった。

監督の代理教師が居るといっても、教室内は半無法地帯となっている。

単行本を手から手へと回し、机を突き合わせて喋りこみ、音楽を聞きつつ寝こけ……沙紗はMDウォークマンで邦楽の新曲を聞いていた。

プレイヤーは自分の物だが、ディスクは泉野 梓のもので早く聞いてしまいたいのだ。

梓の丸文字で書かれた歌詞を目で追い、左手の人差し指で机を叩いてリズムを取る。

ふと、沙紗の手が止まる。

「どう？ 沙紗。Everlasting Truthの新曲は、様子をみて、梓が身を乗り出してきた。顔にはしつかり「良いよね？」と書いてある。」

沙紗は「そうだね」と微笑むと、イヤホンを外して立ち上がった。

「どしたの？」

「ん、ちよつと図書館にでも行こうかと」

「私も行こうか？」

「梓は次の時間の課題やってなさい。次当たるんでしょ？ せんせい、許可下さいな」

う、とうめく友人を尻目に監督役の教師に問うと、教師は気前良く頷き、破り取ったノートのパージに自分の名前を書いて沙紗に渡す。

「何しに行くんだ？」

クラスと名前を書き込む沙紗を見て、教師が首を傾げた。

「……ちよつとした調べ物です」

「そうか、頑張れよ」

教師の激励に丁重にペンを返して微笑むと、少女は紙を持って教室を出た。

蒼洋学院は、同じ名を冠した学院都市の真ん中にある。

学業の中心ともなっているこの学校は、初等部、中等部、高等部、大学部という四つの区分で構成されており、それにある程度の施設がついているのでかなりの敷地を占有している。

「……つんとムダに敷地広いんだから……」

南校舎から図書館に行くまで、冬日溢れる中庭を突っ切っておよそ5分。沙紗は左手で紙を弄びながら、厚いガラス戸を押して建物の中に入った。

カウンターの前を通り過ぎ、種類別の配架地図を覗き込む。

「そこのお嬢さん、今授業中ですよ」

背後の声に、沙紗はぴくりと肩を震わせた。

「授業どうしたの」

「自習中……です。ここに来る許可は貰ってきましたけど」

振り向くと、そこには白衣を着込んだ女性が立っていた。

「じゃあ、その許可証見せてくれる？」

不思議そうに瞬きをする沙紗。

とりあえず、紙を渡す。

女性は二度読み返し、沙紗の胸元にあるタイブローチを確かめた。

「……はい、わかりました。御自由にどうぞ」

軽く頷き、貰っておくよ、と白衣のポケットに紙をしまった。

「……何が可笑しいんですか」

沙紗はずつとニヤニヤしている相手の顔をじつと睨んだ。

「いいや、別に」

女性はゆるくかぶりを振った。

それに対して、沙紗は不審そうに眉をひそめただけでその場を離れる。

「……無愛想な子だねえ」

1人残された彼女は、微かにウェーブのかった短い髪をさらりと梳いた。

本棚の間から戻ってきた時、沙紗は両腕の中に何冊もの本を抱え

ていた。

自習用にと配置された4人掛けの机に陣取り、手当たり次第に文献を引いていく。

目次を見、ページを開き、ある程度読んだら広げたまま置いて次へ。

そんな単調な作業を繰り返している内に、先刻の女性が音もなく近付いてきた。

「何してんの？ お嬢さん。こんな難しい論文ばかり広げて」

女性は沙紗の正面に座り、間近にあった英語の論文集を手に取り、ぱらぱらとめくる。

「授業の調べもの……な訳ないね。専門用語ばかりだわ、これ。辞書が有ったって高校生にこれは無理だよ」

顔をしかめてばさつと本を放り出す女性を、沙紗は顔の下半分を読みかけの本に隠して見つめた。

「……………読めるんですか？」

「読めますよ？ ある程度は。それでも神学専攻で、論文読み漁ったし。ここらへんのは全部読んだかな」

意外そうに目を丸くする沙紗に、女性は優しい笑顔を見せた。

「もし良ければ、何を調べたいのか教えてくれないかな。わたしはここが勤務先だし、いろんなこと調べてあげられると思うよ」

につこりと笑顔を見せた女性に、思わず頷いて応じてしまう沙紗だった。

「で、司書さんに手伝ってもらったことになったの」

「ふーん」

食堂の片隅で昼食をつつきながら、沙紗は先程の図書館での話をしていた。

話し相手は、右側に座ってフォークを握っている圭一だ。

「何を調べるつもりなのかわかんないけど、良かったな、調べやすくなって」

「うん。でも……良かったのかな？ 司書さん使って」

沙紗は首を傾げ、左手に持った箸でエビフライを口に運ぶ。

「司書つてのは利用を手伝う為にいるんだろ？ あっちが手伝うって言ったんだから、使わせてもらえばいいの」

圭一はスパゲティを口に運ぶ。

「……そういうもののなの？」

「そういうモンなの」

ずいっと、フォークを沙紗の鼻先に突きつける圭一。

「あんたさあ、もつとしたたかになった方が良いぞ？」

（そうじゃないと、変なところで危なっかしくて見てられない……その上どっかからかトンビにさらわれかねないし！）

沙紗は綺麗な薄墨色の瞳にフォークの先を映しこんで、ぱちぱちと瞬きした。

そのまま視線を圭一に移し、首を傾げてみせる。

「んー……ま、いいけどね……」

いささか芳しくない少女の反応に控え目な苦笑いを見せ、圭一はまた自分の昼食に向き直った。

放課後といえ、クラブ活動の時間である。

「さっしゅっちゃーん」

例によつて例のごとく、梓は沙紗にすり寄ってきた。

「なっ、何よ。気色の悪い」

たじろぐ風を見せる沙紗。

「あのねえ、今日ね、高村さんがクラブに出てるんだって」

「だから何なの？！」

「一緒に行こっ？」

すでに腕を拘束されている。

（触らぬ神と抵抗しない暴走状態の梓にたたりなし……）

妙に長い、しかも何か間違った格言を頭に浮かべ、沙紗は長く溜

息をついた。

ここ2、3年の付き合いで、操状態の彼女に抵抗しないのが得策なのを良く知っている。

「やっぱり何か用意してるの？」

コートの襟元に付いているベルトを締めながら沙紗が訊くと、梓はすかさず鞆の中からタッパーを出した。

「もちろん、このとおーりっ！」

「何、それ」

「レモンのお砂糖漬け」

につこりと嬉しそうに言う梓。

「頼みの綱はアンタだからね、沙紗！」

「勝手に決めるなっつての」

呆れ気味に言っと、沙紗は梓の肩を押して教室を出るように促した。

「あーん、もういっぱい居る！」

フェンスを取り囲む人ばかりを見て、梓が悔しそうに言う。

「……どうするのよ」

「強行突破に決まってるでしょ！……沙紗には悪いと思うけど」

あまりにも乗り気じゃなさ過ぎる沙紗の腕を引き、梓は早足で歩き出した。

（あの静かな昼休みが懐かしい……）

引っ張られるままに歩く沙紗は、ふとそんなことを思った。

いつもなら昼食と一緒にする梓が居なかったのは、珍しく真面目に彼女がクラブ活動をしていたからだ。

彼女の所属クラブは写真部。新聞部と結託して何かとやらかす彼らは、校内の人気者の写真を取っては密かに売り捌いているという話である。

それはさておき、2人は無事に人垣を抜けて移動式フェンスの傍までたどり着いた。

この間来た時よりも騒がしい。
それもそのはずである。

彼女達の視線の先に、蒼洋学院の最強コンビとまで言われる二人が居るからだ。

「あっ」

コンビの片割れである圭一が、小さな声をあげる。

きゃあきゃあ騒がれてやりにくそうにしていた彼が、とうとう蹴り損ねたのだ。

「お前でもあるんだな、失敗」

「当たり前だろ」

和己にからかわれ、困った様子でボールを取りに走る圭一。

「高村さんだあつ」

「こつち来たよあ」

ボールはちょうど、沙紗達の目の前にある。

圭一はボールを拾って立ち上がり、そこでようやく沙紗に気付いた
「うわー、珍しいもの見たな」

目を丸くし、少女の姿を見下ろす。

「なーにが」

「如月沙紗のサッカー部見学」

「引つ張られて来ただけよ……」

沙紗は上目遣いで圭一を見上げ、肩を竦めて見せる。

「……どうしたの」

「ああ、いや……こんなうるさいのに、聞こえるんだな、って思ってたさ」

「当たり前でしょ、変なやつ。こんな近くにいて聞こえない訳ない」
大仰に溜息をつく沙紗。

大袈裟に呆れて見せる反面、圭一が言った言葉を改めて反芻していた。

“聞こえてる”。

圭一の言葉は“聞こえている”。

梓の言葉も、和己のものも、夏美のものも、周囲がどれほどうるさくとも空気の「揺らぎ」を増幅して聴くことが出来る。

しかし逆に、騒ぎ声は“感じている”のだ。点と線で結ばれた形のイメージとして。

“聞きたく”ないから“感じ取る”。

声は音として聞き取り、意味はイメージとして感じ取る。

波動術士という特殊な魔法使いである沙紗にとって、世間は別の意味で煩い。

「ちよつと、沙紗！」

思考の海に沈みかけていたところを、梓の大声が引き上げた。

「あ……何」

沙紗は何度か目瞬きし、隣に立つ梓に目を向けた。

「せめて聞いてなさいよね……」

梓の呆れ混じりの声に、沙紗は肩を竦める。

その様子を、圭一は笑いを噛み殺しつつながめていた。

「ん、何？」

沙紗が圭一を振り返って微笑むと、圭一もにっこり笑った。

「一緒に遊ばない？ サッカーもどき」

「何で『もどき』なの？」

「人数足りないから。今1チーム4人でも足りないくらい」

「で、あたしに入れて？ この格好で？」

白いロングコートの裾をめくってみせる沙紗。

中身は、コートとお揃いの白いブーツと、ミニスカートだ。

「俺の服貸すしさ。なあやろうよ」

圭一は沙紗と目線を合わせるように少しかがみ、小さく甘えた声を出した。

「どうしようかな……」

ちらりと横目で梓を見ると、口元が「断るな」と動いた。

少年に向き直り、沙紗は頷く。

「じゃあ、部室に来て」

走っていく圭一の背中を見て歩き出そうとすると、梓が沙紗のコートを捕まえた。

「……………何よ」

一抹の不安が沙紗の脳裏をよぎる。

「差し入れ持ってた」

期待に満ち満ちた笑顔。

結局、沙紗は辺り一帯の人々からの貢物を持って行く羽目になった。

「案外こざつぱりしてるんだね」

「うちのマネージャー、やけに気合入れてるからな。…………それにしても、あんた何でこんなモン引き受けてきたの」

圭一は少々苦い表情で、中央のテーブルに積まれた差し入れを指した。

「だって、断れなかったんだもん」

「断れなかったんじゃないかって、断らなかったんだろ。相変わらず、身内が絡むと甘いんだから」

可愛らしく頬を膨らませる少女を背にして、少年は自分のロッカーを開いて手で示す。

「どうぞ」

「どうも。どれを使えば？」

「左端の長袖。洗濯したつきり使ってないから…………ああ、シャツも脱いどけよ。汗かいて風邪引くとまずいし」

そう言う圭一は、沙紗に対して後ろ向きにテーブルに腰かけた。コートと鞆はテーブルに置き、沙紗はまずブーツを圭一のスニーカーに履き替えた。スカートとジャージのズボンに置き替え、上着の留め金を丁寧に外してシャツごと脱ぐ。

そうしてあらわになった背には、変色だけとはいえ火傷の疵痕が残っている。

その時、差し入れを整理しようかと思ひ立ち、ふと圭一は上半身

をひねった。偶然にも沙紗の背を目にして辛そうな表情を見せ、無意識に己の左腕　かつては彼も沙紗と共に、この位置に酷い火傷を負ったのだ　を掴んだ。

口を開くが何も言えず、少年は静かに少女に近付く。

そして、するりと少女の肩を抱きしめた。

相手の肩に顔を埋めるようにし、沙紗から表情は見えない。

沙紗は一瞬驚きを見せ、ふわりと笑う。

「……なーにやってるのよ、えっち」

そう言つと、己の左肩にある少年の右手に、同じく右手で触れた。

「かわいい彼女が居るって、ウワサで聞いたわよ？　こんな所で、浮気しないの」

「ちえ、何だよそれ」

そつと力を込め、右手を下ろさせると、圭一は素直に腕をほどき、そつぽを向いてしまった。

「フラれたからってすねないのー」

くすくす笑い、上着をかぶる沙紗。

「すねてねーよっ」

圭一は、かみつかんばかりの勢いで反応を返す。

「あははっ、何も牙むき出しにしないで……」

沙紗が言い切る前に、2人の足元がふらついた。

思わず2人して天井を見上げる。

「……何だ？」

「地震……じゃなかった？」

取りあえず服を整えながら、沙紗は首を傾げた。

「……もう揺れないみたいだし、さっさとここ出るか」
瑞兆ではないだろうが、何かの前兆とも考えにくい。

気にすることもないだろうと考えた沙紗は、

「うん」

圭一の提案に承諾の意を示した。

翌日。

「……あたしさあ、ここまで程度の低い嫌がらせ初めてされたわ」
食堂で買い込んだ昼食を利き腕で抱え、パックジュースのストロ
ーをくわえたまま、沙紗は梓にむかつてぼやく。

梓は申し訳なさそうに苦笑いを零した。

「何せ全校女子の半分くらいのやつかみ買っちゃったもんね……ゴ
メン、考えナシで」

現在位置、南校舎屋上。

食堂から追い出されてしまったので、ここに来たという訳である。

「ああ、まあ良いんだけど……全校女子の半分？」

「サッカー部自体のファンクラブよ。その一部が高村圭一親衛隊」
「うげ、何それ」

わざとらしく舌を出して嫌悪感を示し、珍しく私服を着込んだ
蒼洋学園は私学であるため、学年章のタイブローチをつければ私
服での登校が許されている　沙紗はむき出しのコンクリートの床
に座って足を投げ出した。

「後の半分は何？　無関心でも決め込んでるの？」

「違うわよ。崇拜対象が違うから、関わってこないだけ」

梓は沙紗に比べて情報通だ。

「……その崇拜対象って、いったい何なの」

だから、沙紗は梓に自分の知らないことを訊く。

「生徒会よ」

「……………」

「ほら、2組の結城君」

「……………」

人名を出されて、沙紗は視線を彼方の空へと彷徨わせた。

「ん、んー……駄目だ、思い出せない」

額を押さえる様に軽く手を当て、かぶりを振ってみせる。

「少なくとも去年何度か遭ったことあるはずよ？」

梓は呆れかえり、溜息混じりに言う。

「沙紗って本当に、勉強以外には……ん？」

屋内へと続く扉が、目の前で音をたてて開いた。

「噂をすれば何とやら、ってかな」

「影がさす、でしょ」

まるで興味を無くしたかのようにそっけなく梓に応えると、沙紗は抱えていたものを降ろし、昼食を開始すべく菓子パンの袋を取り上げた。

外に出てきたのは、日本人らしい漆黒の髪に深い瑠璃色の瞳を持つ少年だった。冬だと言うのに汗をかき、息を弾ませている。慌てて扉を閉じ、そのまま背をついて大きく息を吐き出した。

「ハアイ、結城君。相変わらずモテモテねえ」

「その言い方はよせ」

冷やかし半分で声をかけた梓に、少年は忌々しそうに応じて舌打ちした。

「……給水塔の後ろに隠れたら？　口裏合わせぐらいなら協力してあげる」

億劫そうに、沙紗は少年を見上げて言葉を口にした。

「悪い」

少年は申し訳無さそうな表情を見せると、即座に給水塔、つまりは沙紗達が座っている場所とは反対側に向かつていった。

彼の背中が視界から消えた一瞬の後。

今度はもっと大きな音を立てて扉が開かれた。

「あれ？」

わらわらと出てきた少女達が首を傾げる。

「居ないよ？」

「本当にこつちだった？」

彼女達の視界の中には、立ったまま背の高い手すりにもたれている梓と、その足元に座り込んでパンを食べている沙紗、この二人しかない。何度見てもそれは変わらないのに、女の子達はまだ諦め

ようとしなない。

「……………」

小さな声で呟いた沙紗を、訝しげに眺める梓。

「うるさい」

凜と響く、透き通った声。

決して大きいとは言えない、だが有無を言わせない響きを持つその声で、少女達は弾かれたように沙紗を見て黙り込んだ。

「目的のものが無いと判断したんなら、さっさと別の所に行ってくれない？」

黒いスラックスに包まれた脚を片方だけ体に引き寄せ、好意的とは言えない視線を少女達に向ける。

気圧された少女達は、慌てて屋上から出て行った。

たつぷり20秒程経ってから、沙紗は眼を閉じる。

「もう、良いんじゃない？」

大きめの声で穏やかに言うつと、給水塔の裏から先程の少年が出てきた。

「本当に助かった、ありがとう」

気まずそうに言う少年。

「別に……利害が一致しただけだし」

すぐ近くで立ち止まった影の主を一瞥すると、沙紗は何事もなかったかのように、二つ目のパンに食いつく。

「機嫌を損ねたようだな」

少年は沙紗の様子を見て苦笑する。

「ああ、大丈夫よ。結城君が怖いだけだろうし」

「梓！」

にやにやと意地の悪い笑みを見せて結城少年に言う梓を牽制しようつと、沙紗は大慌てで声を荒らげた。

「はいはい。これ以上は言いませんよ」

梓は表情を一変させ、「やれやれ」と肩をすくめて少年に苦笑を見せた。

「ゴメン、ゴメン。紹介忘れてたわ。結城君、この子が如月 沙紗。私と同じA組よ」

まだやぶ睨みでこっちを見ている沙紗の頬をつつつきながら言う。
「中高生徒会会長の結城だ。宜しく」

差し出された手が、沙紗の視界に映る。

少女は首をめぐらせて少年の掌を見、握手に応じた。

「よろしく」

ほんの僅かな時間だけ握り、すぐに手を離す。

冷たい水の気配。

（この人、水術が得意なんだ……）

珍しいものを見たと思いながら、相手の顔を見つめる沙紗。

「何だ？」

先程までの様子を考えれば長すぎる時間こちらを見ている少女に、結城は首を傾げた。

「うつん、何でもない」

沙紗はかぶりを振った。

まだまだいろんな人がこの学院にいる、と思いながら。

「ああ、いたいた」

昼休みも終わりに近付き、教室へと急いでいた沙紗達を引き止めたのは、いつか聞いたアルト・ヴォイス。

「探したよ、えー……如月さん」

立ち止まって振り向いた先に、微笑を湛え、白衣を着込んだ女性
がいた。

その胸元には大きめの名札をつけ、手には紙束を持っている。

「司書さん？ どうしたんですか」

「予想外に早く調べ物が終わったんで、結果報告にきたんだよ」

紙束をひらひらと示して見せる女性。それを見て、沙紗の目は丸
くなった。

「頼んだの、確か昨日でしたよね？」

「うん。あれからネットから文献からあたってみただけだね、出てくる出てくる。まあ、殆どが神話の授業内容からもう少し突っ込んだようなものばかりだったけど」

「十分ですよ！ もらっても良いですか？」

「良いよ。あげる為に持ってきたんだし」

沙紗は差し出された束を受け取り、早速目を通し始めた。

ところどころに注釈が書き込まれている。そればかりか、ラスト2、3枚は全て手書きだ。少々鋭角がきつい字だが、読みにくくはない。

「……よくまあ、ここまでやりましたね」

「ん？ そりゃあ可愛いコのためなら頑張るもん、わたし」

(……可愛いコ……？)

「とりあえず、ありがとうございました」

普通、女からは聞かないような言葉を敢えて聞き流し、沙紗は深々と頭を下げた。

「また何か調べ物があつたら言いなさいね。んじゃ」

女性はひらりと手をひらめかせると、背を向けて去っていった。代わりに、少し離れていた梓が寄ってくる。

「アンタはまた何を調べ始めたのよ」

眉をひそめ、呆れた顔を見せる梓。

「いや、ちよつとゲームの関係でね」

「ほどほどにしないよ？」

上目遣いで自分を見る梓の姿に、沙紗は世話好きの長姉を思い出した。

小さく微笑む。

「わかってるよ。体調崩すほどやり込みはしませんって」

沙紗は茶化すように言うと、梓を急かして教室に入ってしまった。

Program 5 , clear !

P r o g r a m 5 R e s e a r c h (後書き)

初稿は2002〜3年です。結構かかっています。
当時は高校生でしたから、内職で書いたのが殆んどかな…… (爆)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573x/>

Lost Blue

2011年10月10日03時14分発行